
ある友情と絆の物語

究極神団・零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある友情と絆の物語

【Nコード】

N 8 6 7 9 H

【作者名】

究極神団・零

【あらすじ】

数百年前、人間の世界にモンハンのモンスター達が現れた。原因は不明。だが両方の種族達はそれを受け入れた。それから数十数年後、一人の少年と一匹の龍が少年の周りの人達を巻き込んでいく絆と友情の完全オリジナルストーリー。只今極大スランプに陥っております（汗）次回更新が全くもって未定です（泣）

プロローグ（前書き）

初めまして！

究極神団と申します！

文章力皆無、更新不定の自分ですが宜しく御願致します！

プロローグ

僕は小さい頃、雪山で遭難した。

「お父さん〜！お母さん〜！」

家族で遊びに来ていたのだが吹雪ではぐれてしまった。

「うつ………。寒いよお………。お腹すいたよお………。」

途方に暮れていた僕。

次第に段々眠気が襲って来る。

もう駄目かと思っていた。

その時、アイツと出会った。

その姿は蜥蜴のようだけど大きさが僕と同じぐらいで全体的に黄色い。

——いや、蜥蜴と言うより、龍と言うべきだ。

そいつの背中に乗せられた僕は気を失った。

暫くして目を覚ますと家に居た。

その時の僕は殆ど覚えていなかった。

覚えていたのは見慣れない生物に背に乗せられたという事だけだった。

少ししてお父さんとお母さんが来た。

二人共大泣きした。

その後見慣れない生物がやって来た。

そいつは僕を背に乗せた奴だった。
僕を助けてくれたのだろうか。

そいつは僕に近寄って眼に涙を浮かべていた。
僕を心配してくれたのだろうか。
僕はそいつの頭を撫でてあげた。
そいつは甘い声を上げた。

「グキユウウウ……」

その声は物凄い可愛かった。

そして僕は決めた。

僕を助けてくれた命の恩人、いや、（後から知ったが）恩龍、ティ
ガレックスと一緒に生きていく事を。

プロローグ（後書き）

次回からは数年後の話です。

どうか暖かい眼で見守って下さい！

第一話 十年後（前書き）

文章に自信がありません……………
しかもタグと一致してないかもです……………（汗）

第一話 十年後

あの日から十年

僕、龍人は中学三年生になった。

「う…………ん……………」

僕はまだ寝ていた。

因みに今日は一学期最後の日。

「ん……………？」

ふと目が覚めて時間を見る。

時間は七時半、余裕なのでもう一度寝ようとしたら、

「グルウウ……………」

声がした。

この聞き慣れた鳴き声は……………彼奴の声だ
けどまだ眠気が勝っていたから僕はもう一度寝ようとしたら――

噛まれた。

「止めて！ 起きるから！」

頭を噛まれて無理矢理起こされた。

だけど痛くは無いし血も出ていない。

「レクス、おはよう。」

僕を噛んだ奴の正体はレクス。

種族はティガレックス。

あの日に命を助けて貰った僕の恩龍だ。

「ゲキユウウウ………」

こいつはまたよく見ると結構可愛い。

凶暴と言われる轟龍だけど何故かレクスは大人しかった。

——だが何故そんな生物が人間の世界にいるだつて？

——それは分からない。

数百年前にある事件が起きてそれが原因で現れたのだと言う。
その事件が何なのかは知らない。

「グルウウウ」

レクスが器用に両前足で時計を持ってきた。
針は七時四十五分を指していた。

「あ！ ヤバい！」

僕は急いで上に上がった。

僕とレクスは同じ部屋で寝ている為に地下が僕とレクスの部屋だ。
それなりに結構広い。

レクスが自由に動く事が出来る為だ。
家全体も広い。

僕は一階へ上がり朝食を急いで済ませ玄関へ向かった。

そこでは既にレクスが待っていた。

「それじゃあレクス、行ってくるよ。」

そう言いながらレクスの頭を撫でてやる。

「グ……………キユウウ……………」

笑顔になるレクス。

少しの間撫でてやり家を出ようとするとレクスが心配そうな顔で見
ていた。

「大丈夫だよ。何も起こらないよ。」

心配いらないよ。

そう言うふうにレクスに言う。

僕の思いが伝わったのだろう。再び笑顔になるレクス。

「それじゃあ行ってきます！」

僕は急いで家を出た。

～学校～

「遅いぞ龍人！」

「ゴメンゴメン（汗）」

今僕に話しかけて来たのは幼馴染みの海斗。

「また寝坊かあ？」

「まあ…………、その通り（汗）アハハ…………（汗）」

苦笑いでやり過ごす。

「おはよう。タツ。」

「おはよう。アキ。」

今は幼馴染みの秋葉。

まあ…………、僕の恋人。

中三の癖に生意気な？そんな事言われても向こうから言ってきたから…………

僕も好きだからOKしたけど。

「口にご飯粒付いてるよ」

と言ってそのご飯粒を食べる秋葉

「ちよっ！？アキ！？／＼／」

何も皆の前で、と思う。

「いいじゃない。減るもんじゃないから。」

と言われた。

「お二人さんお熱いねえ。」海斗がニヤニヤしながら言う。

「そんなんじゃ……………」

反論しようとしたけど秋葉が抱きついているので反論出来なかった。

そして終業式

やたらと話が長かった。

海斗は何故か瞑想していた。

秋葉に至っては堂々と寝ていた。

帰りの連絡会

「まあ夏休みだ！いっぱい遊ぶんだぞ！」

大雑把で遊び好きな先生。

「以上！」

開始十秒で話が終わる。

こんなんでいいのか、とツツコミをいれなくなるけどいれない事にした。

「今日どうする？」

海斗が聞いてきた

「何処かに遊びに行かない？」

秋葉が意見を述べる。

「賛成！」

海斗はノリノリで賛成する。

でも僕は………

「ゴメン、僕は無理。」

僕は誘いを断った。

レクスの事である。

「何だよ」

「用事があってね……………」

用事というよりレクスと一緒に居たいだけなんだけどね。

適当に誤魔化す。

二人にはレクスの事は話していない。

「そうか……………分かった。」

「ゴメンね、じゃあ。」

僕は急いで帰った。
レクスの元へ。

「よし。後をつけるか」

「賛成！」

二人は怪しいと思ったらしく僕の後をつけ始めた。

だけど僕は気付く事は無かった。

第一話 十年後（後書き）

評価、感想待ってます。

第二話 遭遇（前書き）

今回も自信が無いです（汗）

はいパングですパング（汗）

第二話 遭遇

「家」

僕はあの後走って家まで向かった。

一秒でも速くレクスと一緒に居たいからだ。

「只今」！

玄関を開けるとすぐそこにはレクスが待っていた。

「グルウウ」

お帰り、とでも言っているのだろう。
だから僕は、

「只今、レクス。」

と言ってレクスの頭を撫でてやった。

「ゲキユウウ……………」

レクスも顔を擦り寄せて来る。

暫く僕はレクスを撫でたままでいた。

「しかしよく考えたらさあ」

「何？」

一方二人はまだ道路にいた。

「彼奴とは何度も遊んでるけど彼奴の家に上がった事一度も無いんだよな。」

「私もよ。タツの家に上がった事無いわ。」

二人共家に入った事が無いのだと言う

「ぜってー何か隠してるな」

「二人で突き止めましょう！ タツの秘密を！」

「おう！」

なんか無駄な調査隊が結成された瞬間だった

その頃龍人は

レクスに噛まれていた。
ダメージは無いが。

「前が見えないよレクス。」

とは言いつつも嬉しそうな龍人。

その気持ちを知ってか離れようとしなないレクス。

「しかし凄い牙だねーレクス。」

口の中は鋭い牙がびっしりと並んで生えていた。

「グル……………キュウウ……………」

物凄い甘えている。

噛むのを止めて龍人に抱きつく。

「ちよっ！？レクス！？／／／」

嬉しくなるが恥ずかしくもなる龍人。

そんな龍人をお構い無しにさらに密着する。

「／／／／」

嬉しくて堪らない龍人
だが絵的には危ない。

言葉で表すと龍人の上にレクスが若干押し倒すような感じで抱きついている。

龍人はその為顔が真っ赤である。

「キュウウ……………」

最早龍なのか分からない声を発するレクス。

そんなレクスをまた撫でてやる龍人。

何とも微笑まし光景である。

学説が覆された瞬間であった。

「ついたな」

「ついたわね」

その頃、無駄な調査隊の二人、海斗と秋葉は龍人の家の前にいた。

「いよいよだな」

「いよいよだわ」

「この家に隠された秘密を解き明かす時が!!」

そう言って二人は足を踏み入れた。

そして家にこっそりと入っていった。

読者の皆様方は真似をしないで下さい。

海斗と秋葉が忍び込んだ頃、

「グルア？」

レクスが何者かの気配を感じ取った。

「どうしたのレクス？」

だがレクスには龍人の声は届いていなかった。

辺りをキョロキョロと見回すレクス。

「グルアア」

レクスは気配のする方へ向かった。

「何処に行くの？ レクス？」

気になってレクスの後を追う。

「「お邪魔します……………」」

小言で言う二人

「凄い広いわね。」

広さに驚く二人。

「絶対何かあるわね」

「絶対何かあるな此は」

秘密を探す二人。

その様子を見ている龍が一頭。

レクスだ。

「グルウウ……………」

小さい声で唸るレクス。

「あつ！」

レクスに追いついた龍人が二人に気付く。

「二人共……………後をつけてきたみたいだね……………（汗）」

そんな事よりレクスの事がばれてしまう。

早く移動しなきゃ。

そう考える龍人はレクスに移動するように言った。

レクスは何故？ というような顔で龍人を見る。

「レクスの事が皆に知られると……………」

悲しそうな顔をする龍人。

「グルウウ……………」

心配して顔を覗き込むレクス。

その眼には涙が浮かんでいた。

「グルウウ!？」

——泣いている。

大切な人が。

その事に驚きを隠せないレクス。

「ゴメンレクス。心配かけたね」

龍人は直ぐに涙を拭き心配かけたね、とレクスに言う。

だが涙は次々と、少しづつ溢れ出ていた。

「グルアアア」

レクスは体を海斗と秋葉の方へ向け唸る。

大切な人が涙を流す事になった元凶の方へと。

そんな異変（レクスの接近）に気付く二人

「何か……居るな……」

「居るわね……それも物凄いのがね……」

二人は慎重に行動し始めた。

「グルアアアア……」

レクスが叫ぶ。

侵入者を排除する為に。

——大切な人を守る為に。

「うわっ！」

「きゃっ！」

二人は驚いて腰を抜かした。

「いったい……何が居るんだ……？」

驚きを隠せない海斗。

秋葉は恐怖に怯えてしまつて震えている。

足音がする。

レクスが二人に近付いていく。

足音は段々と近くなる。

「来るなら………来い！」

意を決した海斗。

そしてレクスが姿を表す。

「……………」

レクスは黙っていた。

レクスを見た海斗は、

「コイツは……………！」

驚きを隠せずにいた。

「グルアアアアツツ………！」

—— バインドボイス。

凄まじい衝撃が家中を駆け巡る。

二人共その衝撃と声の大きさに耳を塞ぐ。

—— もう駄目だ。
死を覚悟した二人。

レクスは二人に飛びかろうとした。

その時、

「止めて！」

龍人がレクスを止める。

その眼にはもう涙は浮かんでいなかった。

第二話 遭遇（後書き）

評価・感想待ってます！

第三話 親友（前書き）

遅くなりました（汗）

毎度の事ながら暖かい眼で見守って下さい！

では第三話をどうぞ！

第三話 親友

「止めて！」

龍人がレクスを止める。

その眼はにもう涙は浮かんでいなかった。

「グルウ！？」

何故止めるの！？ という顔をして龍人を見る。

この隙にレクスから離れる海斗と秋葉。

「もう大丈夫だよ……………」

レクスの頭を撫でて宥める龍人

「グルウ……………」

レクスは撫でられた事により龍人に甘え始める。

殺気はもう無くなっていた。

「おい龍人、そいつは……………何だ？」

海斗は龍人に聞いた。

「……………コイツはレクス。ティガレックスのレクス。僕の……………命の恩龍さ……………」

そう答える龍人

「ティガレックス！？ それに命の恩龍って……………？」秋葉が聞く

龍人は話した。

昔に命を落としそうになった事。

その時、レクスと出会い命を助けて貰った事。

全てを話した。

「そんな事が……………」

「何で話してくれなかったの？」

秋葉が一番の疑問を龍人へぶつける。

「それは……………」

口を濁らす龍人。

「あ……………ゴメン……………」

謝る秋葉。

「いいんだ……………。もしレクスの方が皆に知られたらレクスが何処かに連れていかれると思ったから……………嫌われると思ったから……………」

段々と再び眼に涙が浮かぶ龍人

「……………」

「……………」

二人は掛ける言葉が無かった。

「グルウウ？」

心配して顔を覗くレクス。

「うん……………大丈夫だよ。」

涙を拭きレックスを安心させる龍人。

その時、海斗が口を開いた

「……………事情は分かった。けどな、俺達の絆はそんな軽い物なのか？俺達が秘密をベラベラと喋るような奴等か？」

少し怒り口調で言う海斗

「違うだろ！お前とそのティガレックスの絆と同じぐらい俺達の絆も固い物だろ！」

「……………そうだけど」

何も言えない龍人。

「安心しろ。コイツの事は誰にも言わねえ。約束だ」

笑顔で歯をキラリと光らせて龍人に言う海斗

「海斗……………」

海斗を見る龍人。

「私もよ、タツ。誰にも言わないわ。」

「アキ……………」

秋葉にもそう言われ顔を下へ向ける龍人。

「グルウ？」

レクスが龍人の顔を覗く。
龍人は泣いていた。

「グルア！？」

レクスは驚いた。
龍人が泣いているから。

「レクス……………！」

「ゲギヤア！？」

急に龍人に泣きながら抱きつかれ驚くレクス

「海斗、アキ、ありがとう……………」

そつ二人に告げ、お礼を言う龍人。

「龍人……………」

「タツ……………」

笑顔になり龍人とレクスを見届ける海斗と秋葉

暫くして

「おりゃああああ!!!!」

「グルアアアアア」

何故か腕相撲をしていて、海斗が完敗していた

「弱いね」

海斗にそう言う秋葉

「彼奴が強いだっつーの」

言い返す海斗

「グルア」

勝ったよ！　と言うように龍人に笑顔を向けるレクス

「頑張ったね。」

笑顔でレクスに言い撫でてやる龍人

「グ……………キユウウ……………」

甘えて龍人に抱きつくレクス。

「え？　ちよっ！？　レクス！？／／／／」

レクスに急に抱きつかれて後ろに倒れる龍人。

何も人前で、という気持ちで物凄く顔が赤くなる

「キユウウ……………」

最早龍では無い。

レクスからは龍としての威厳を微塵も感じる事が出来ない。

「顔赤いぞ（笑）」

ニヤニヤしながら龍人をからかう海斗。

「／／／／／」

恥ずかしくて顔を伏せる龍人

「ずるい！ 私も！」

そう言う横から龍人に抱きつく秋葉。

「ア、アキ！？／／／／／」

更に赤くなる龍人。

「グルア」

龍人は自分の物と言わんばかりに威嚇をするレクス

「何よ？」

負けじとレクスを睨み返す秋葉。

「止めてよ二人共！」

が、残念ながら龍人の声は二人には届かなかった。

暫く睨み会うレクスと秋葉。

「あらー（汗）」

苦笑いしながら見る海斗。

五分後

やっと勝敗がついた。

「グルア」

勝者はレクス

「負けたわ…………、悔しい！」

龍人を自分の物に出来なくて悔しがる秋葉

これからレクスと秋葉が龍人を巡る争奪戦が何度かありそうだ。

（僕は誰の物でも無いんだけど……………（汗））
心の中で、そう呟く龍人だった

「キュウウ……………」

再び甘えるレクス。

また抱きつかれる龍人

「……………」

もう顔を赤くする事しか出来ない龍人。

「らぶらぶですねえ」

からかう海斗

「……………// // //」

反論は出来ない。

その通りだからだ。

「うつっ……………」

悔しそうに龍人とレクスを見る秋葉。

龍人とレクスのらぶらぶな時間は暫く続いた。

その間ずっと顔が真っ赤だった龍人。その事が海斗のからかいのネタにされたのはまた別の話である。

第三話 親友（後書き）

評価・感想待ってます！

レクス

「グルアア」

第四話 新たなる出会い（前書き）

はい新キャラの登場です。

レクス

「グルウ」

レクス………何で君が（汗）

レクス

「グルアア」

え？新キャラって誰かって？
言えないよ（汗）

第四話 新たなる出会い

（翌日）

午前四時

「楽しい？レクス？」

「グルア」

楽しいよ龍人、とても言っているのだろつ。
嬉しそうな顔で言うレクス。

何故こんな朝早くに起きているのかというと、レクスの散歩の為だ。
人目につかない早朝が良いと考えた龍人の案だった。

レクスはあまり散歩が出来ない為にとっても楽しみに待っていた。
それに龍人と一緒に居るからでもあった。

散歩内容は主に河原に行つて追いかけて。

勿論の事ながら全力で走る。

だがスタミナに圧倒的差があり何時も龍人は負ける。

なので何時も噛まれる。

そして今日も、

「ハア…………ハア…………負けた……………」

「グルアア」

勝った、という顔をしているレクス。

龍人はへ口へ口である。

そして――、

噛まれる。

「前が見えない……………（汗）」

だが本心は嬉しい龍人。

だから自分から離そうとしない。

「グルウウ」

落ち着いた鳴き声を発するレクス。

暫くして家に帰る二人。

その途中、

「グル？」

レクスが何かを見つけた。

「どうしたのレクス？」

レクスの視線の先には、

「卵？」

卵があつた。

それもかなり大きなサイズであつた。

「何の卵だろう………」

卵の色は只、白かった。

何の模様も、色も無く、只純粹に白かった

「グルアッ」

レクスが何か言っている。

「え！？ 持つて帰るだって!？」

その言葉に首を縦に振るレクス。

「そして卵を孵すだって？」

また首を縦に振るレクス。

「…………… まあレクスがそう言うなら。」

龍人とレクスは謎の卵を手に入れた。

家

レクスが暖めようとしたが、いかにも割れそうなので結局二人で暖める事になった。

二時間後、

（ピクッ）

「今………、動いた？」

「グルウ？」

卵が動いたのだという。

（ピクピクッ）

「やっぱり動いてる！」

「グルアア！」

二人の期待が高まる

そして――

（パリン）

「か、孵ったー！」

「グルアアア！」

喜ぶ二人

何が生まれたのだろうか。

「……………」

「……………」

しかし二人は生まれた生物を見て黙ってしまった。

「これって……………」

「グル……………」

「だよね……………」

その姿は龍。

体色は紅。

禍々しい伝説の存在。

果たして生まれた生物の正体は――

「ミラボレアス……………しかも亜種……………」

「グルア……………」

そう、卵から生まれたのはミラボレアスの亜種、ミラバルカンであった。

「ギヤア」

生まれたばかりと言ってもサイズは龍人の身長半分より少し高い。

「ギヤア、ギヤア。」

二人に何かを伝えようとしている。

「何？」

でも龍人には分からない

だが

「グルア」

レクスには分かったようだ。

「何て言ってるの？」

レクスに聞く龍人。

「グルアア」

と言うと行動を始める。
ジェスチャーのようだ。

自分の目の前に何かを置いてそれを口に持っていき噛んでいる。

「分かった！ ご飯だね！？」

龍人が答えると

「グルウウ」

正解だよ、と言いたげな顔をしているレクス。

「でも最初から言ってくれた方が早いんじゃない………」

「グル？」

レクスは首を傾げる。
いや、しらをきっている。

「レクス……、それよりご飯だ！」

レクスの事は後にしてご飯を取りに行く龍人。

しかし何を食べるのだろう。

二分後

「お待たせ！」

龍人は取りあえず大量の肉を持ってきた。

「グルアア！」

レクスは眼を輝かせている。

「これはこの子の分だよ。レクスの分もちゃんとあるから。」

レクスの分の肉を取り出してレクスに渡す。

しかしいったい何処から手に入れているのだろうか。
この大量の肉を。

因みにレクスは、

「!!!!」

眼をさつきより輝かせていた。

「ギャウ？」

戸惑っているバルカン。
食べていいのかと。

「これは君の分だから遠慮なく食べていいよ」

その気持ちが伝わったのか、肉を食べだすバルカン。

とても美味しそうに食べている。

「美味しい？」

と聞くと

「ギャウ！」

美味しい！ という風に答えたバルカン。

それを聞いて笑顔になる龍人。

その頃レクスは幸せそうな顔で仰向けになっていた。

十分後食事終了

「うん……………」

「グルウ」

「ギャウ？」

龍人とレクスは話し合っていた。

ミラバルカンをどうするかという事で、その事を全く分かっていないバルカン。まあ分かる筈も無いのだが

「決まりだねレクス。」

「グルアア」

何かを決断した二人。

「今から君の名前はクレナイ。この家で僕達と一緒に暮らすんだよ。分かった？」

「グルアア」

何と二人はミラバルカン、クレナイと一緒に暮らすと言う。

「クレ……………ナイ……………？」

「今喋った！？」

「グルアア！」

クレナイが喋った！

「クレナイ……………ギャウ！」

どうやら気に入ったようだ。

「気に入ってくれてよかった。」

「グルウ」

喜ぶ二人。

「ギャウ！」

クレナイも嬉しそうにはしゃいでいる。

新しい家族、クレナイが加わり賑やかになった龍人とレクス。
三人の生活はこれからどうなっていくのか。

全ては………謎。

この出会いが何を生み出すのかは、

誰も……知らない。

第四話 新たなる出会い（後書き）

と言う訳で新キャラのミラバルカンことクレナイが龍人とレクスの家族になりました。

レクス

「グルア！」

これ、嬉しいからって後書きではしゃがないの（汗）

レクス

「グルアア！」

おぶう！

岩無いのに岩玉飛ばさないで……………（汗）

第五話 居場所（前書き）

サブタイトル全く関係無いです

レクス

「グルア」

ごめんなさい……………（汗）

第五話 居場所

クレナイと出会ってから二時間後。

「おい！龍人！」

「タツッ」

海斗と秋葉がやって来た。

「待つて！ 今開けるからさ！」

龍人は急いで玄関を開けにいった。

「遅いぞ！」

怒る海斗。

「ゴメンゴメン！ まあ上がったよ。」

龍人は二人を家に上げた。

「グルアッ」

いつの間にかレクスが部屋から上がって迎えに来ていた。

「いつの間に……………（汗）」

そしてそのレクスの背には――

「ギャウ？」

クレナイが乗っていた。

「クレナイ……………（汗）」

その姿は何とも可愛い
ちよこんと乗っている姿が……………

「何だそいつ？」

「カ、カワイイ！」

クレナイを見て驚く？ 二人。

特に秋葉は今にもクレナイに抱きつきそうだ。

それを察知し――

「グルッ」

レクスが行く手を阻む。

「そこ退いてちょうだい。」

「グルア」

意地でも抱きつきたい秋葉。

それに対して通す訳にはいかないと頑張るレクス。

長いので省略。

三分後。

「グルア」

レクスの勝利。

「はぁ……………」

秋葉が結局諦めたのだ。

「ギャウ！ ギャウ！」

とりあえず喜んでいるクレナイ。

まだ小さいから許してあげよう。

「えっと……………紹介するね。僕の新しい家族、ミラバルカンのクレナイ。」

クレナイを二人に紹介する龍人。

「ミラバルカン!？」

「しかも喋るの!？」

やはり驚く。

「うん。僕もびっくりしたよ。しかもクレナイは卵から孵ったんだよ。」

「卵から孵った!？」

「嘘でしょ!？」

やはり信じられない二人。

「全部本当なんだよ」

真剣な顔で言う龍人。

「本当のようだな……………」

「それにしても卵から孵ったって……………何処で拾ったの?」

秋葉が何処で拾ったのか聞く

「えっと…………道路の脇にあった」

道路の脇ににあったと言う。

しかし何故そんな所にあったのか。

「道路の脇につて…………何でんな所に（汗）」

「知らないよ（汗）僕に言われてもさあ（汗）」

「ギャウ？」

クレナイは自分の事なのに全く分かっていない。

まあ許してあげよう。

「グルウウ」

そんな中レクスが遂に意見を出す。

「なあにレクス？」

「グルルウ……………」

何と言っているのだろうか。

「空から降ってきたかもしれない？ それもあるかも……………」

レクスは空から降ってきたかもしれないと言った。

「空、か……………あり得るかもな」

「確かに……………」

満場一致で空から降ってきたということに決めた。

絶対違うが（汗）

「まあ、いいや（汗）皆で遊ぼうよ！…」

皆で遊ぼうと提案する龍人。

「「賛成！…」」

「グルアア！」

「ギャウ！」

皆乗った。

クレナイもこの事は理解したらしい。

皆で遊ぶ事に決まった。

だがいったい何をして遊ぶのだろうか。

というよりちゃんと遊べるのだろうか（汗）

第五話 居場所（後書き）

クレナイ

「ギャウ！」

遊んであげるからちょっと待って！

はい、若干ネタ切れ気味です（汗）

話数まだまだなのに……………（汗）

クレナイ

「ギャウ？」

駄目だ……………クレナイにはまだ分からない……………（汗）

第六話 かくれんぼ（前書き）

重大なお知らせ

皆様、私のこの小説 ある友情と絆の物語 を読んでいただき誠にありがとうございます。

これまで、頑張つて2日に一回の更新をして来ましたが、最近やつと購入したモンスターハンター3をプレイする為に更新が一週間に一回、或いはそれ以上になるかもしれません。

大変申し訳ございませんが宜しく御願い致します。

第六話 かくれんぼ

皆で遊ぶ事にした龍人達。

何をして遊ぶのかと言うと。

「……………何で俺が鬼なんだよ」

かくれんぼだった（汗）

最初はクレナイが鬼だったのだが誰も居なくなっただけだと思い込み泣き始めてしまい鬼処では無かった。

その時秋葉が抱こうとしたが龍人やレクスの後ろにクレナイが隠れてしまった為に秋葉は沈んでいる。

因みにクレナイは龍人の頭に乗ったまま龍人と一緒に隠れている。

レクスは体が大きいが見つからない自信があるらしく「グルア」と言っていた。

「くそ、秋葉もいつの間にか隠れやがったし……………まあ探すか」

嵌められた海斗であつた。

「まずは龍人から探すか……………」

とは言つたものの、広すぎて見つけれぬのか。

と思つたら、

「ん？」

海斗の目線の先には、

クレナイの翼が見えていた。

「以外とすぐに見つけれるもんだな（汗）」

と言いつつ近づいて行つたが、

「うっそだぁ（汗）」

偽者だった

「騙された……………（汗）」

海斗が見ていたのは鏡に映ったクレナイだった。

その前に気づけよ、海斗（汗）

「こっちか！」

だが、

もう既に居なかった。

「何やってんだよ俺（汗）」

少し落ち込んでしまった海斗。

「まあ、探せばいいか」

海斗はポジティブ思考のようだ、

そして次の搜索に向かった。

「何処だあゝ？」

あれから十分、まだ一人も見つけれていない。

「何で見つかんないんだよゝ（汗）」

もう諦めかけていた、その時

足音がした

「誰か………居るな」

海斗はゆっくりと気配を消して足音に近づく。

足音も海斗に近づく。

そして――

「見つけた!」

「きゃあ!」

何と秋葉だった。

「見つけたぜ」

ニヤニヤしながら言う。

「見つかるならタツの方が良かった……………」
半分泣いている秋葉。

何故泣く(汗)

「因みにお前で最初だから」

この言葉に

「嘘！？私が最初！？これだけ時間掛かって!？」

やはり驚く

「ああ、そうだ」

秋葉はしゃがみこみの字を書いている。

「しょうがねえだろ（汗）広いんだから（汗）」

とりあえず再び探し始めた。

「……………」

海斗の目線の先には

「ギャウ？」

クレナイが居た

クレナイは辺りを何度も見回している。

とっても可愛い。

「クレナイ見つけた。」

「ギャウ!？」

驚くクレナイ。

その拍子に跳び跳ねてしまった。

「クレナイ!」

龍人が慌てて受け止めようとしたが、

「ギャウ?」

無駄だった。

何故なら空を飛んでいるから。

「いつの間に飛べるように(汗)」

ただ驚く事しか出来ない龍人。

クレナイはゆっくり龍人の頭の上に降りる。

「ギャウ！」

飛べた事に喜んでいるクレナイ

「もう、クレナイは……………（汗）」

心配する龍人をよそに

「ギャウ」

「あとはレクスだけか……………」

以外にレクスが見つからないと言う。

「レクスを探すのは至難の技だよ（汗）」

龍人が海斗にそう告げた。

「どういう事だ？」

勿論聞き返す

「昔に二人でかくれんぼした時に……………」

そう言って過去を話し始めた。

それは五分ぐらいだったが何倍にも感じるぐらいの内容だった。

「という訳なんだ。だから不可能に近いよ（汗）」

凄まじい内容により絶句状態の二人。

「？」

クレナイだけ分かっていない。

「まあ、探すか……（汗）」

とにかく探す事にした。

一時間後、

まだ見つからない

「何処に居んだよ（汗）」

全く見つからない。

「こつ言つとき後ろに居たりして……………」

と後ろを向くと、

「グルア」

居た

「居たよ（汗）」

「何時からそこに（汗）」

「グルア」なんて言っているのか分からない。

「ま、まあけつこつ前から居たんだって（汗）」

こつして、かくれんぼはレクスの一人勝ちで終わった。

秋葉はずっと落ち込んでいたと言う。

そして結論。

二度とかくれんぼはしない

第六話 かくれんぼ（後書き）

レクス

「グルア」

龍人

「作者さんは3をやりに行つたよ」

レクス

「グルア（汗）」

龍人

「だよね（汗）」

第七話 トランプ（前書き）

短い（汗）

更新遅かった癖に短い（汗）

皆様ごめんなさい（泣）

その上にサブタイトルまで適当と……………

ちよつとヤバイ（汗）

第七話 トランプ

レクスの圧勝に終わったかくれんぼから二時間後、

皆ご飯を食べていた。

龍人と海斗と秋葉は普通に食べていた

レクスは食った食ったと言わんばかりにお腹を膨らませて仰向けに寝ている。

幸せそうな顔をして。

だが意外にも一番早かったのはクレナイだった。

その時、皆眼を丸くした。

レクスより早く食べ終わる者など今までに居なかったからだ。

そしてそのクレナイはと言うと――

「ギャウツ！ ギャウツ！」

3をやっていた（汗）

何故出来る（汗）

その理由はご飯を食べる一時間前の事。

「えいつ！」

龍人が3をプレイしていた所、

「ギャウ〜？」

クレナイがその様子を首を傾げながら見ていた。

「クレナイもやってみる？」

と、龍人が冗談混じりで言ったので

「ギャウ！」

と言ってやりはじめたのがきっかけだった。

だがクレナイは龍人の予想を遙かに上回る物凄い速度で上達し既に龍人を抜き去っていた。

HRは小一時間で399いう化け物ぶりを見せていた（汗）

まずあり得ないのだが（汗）

狩りとしての本能なのだろうか

眼の色が深紅の瞳から火山のマグマの色に変わっていた。

だが身体の色まではまだ変わっていなかった。

てかやりこみすぎだよ（汗）
誰に似たのか…………

「ギャウ」

暫くして全員が再び集まって話し合いをしていた

「何する?」

「さあ？」

「はぁ（汗）」

「グルア」

「ギャウ？」

クレナイだけ何時もの通り分かっていない。

頭に？マークを浮かべている。

暫くして

「よし！大富豪をやるう！」

「ハア？」

「グルア？」

「ギャウ？」

海斗が突然大富豪をやろうと言い出した。

「何で大富豪……………（汗）」

「やっぱり訳分かんない奴ね（汗）」

「ギャウギャウ」

「グルア……………」

呆れる二人

大富豪って何？とレクスに聞いているクレナイ。

それを分からないと答えるように首を横に振りながら言うレクス。

「さあやろうぜ！」

強引に始める海斗。

だが海斗はこの後悲劇を見る事になる。
其れを知るよしもない

ルールをレクスとクレナイに教えてから始めた。

すると――

「何故だあああああああ……！！！！！！」

撃沈

只今十回目

海斗は散っていた。

理由は一回目からど貧民の為。

因みに大富豪はと言うと――

「ギヤウ」クレナイがずっと大富豪だった

今までのトータル成績順位

龍人 三位

海斗 ドベ

秋葉 四位

レクス 二位

クレナイ 一位

と言うあり得ない結果になっている

因みに海斗とクレナイは不動

以外とレクスは上手くしょっちゅう富豪になっていた

反対に秋葉は苦手らしくよく貧民となっていた

「何で勝てないんだろう……………」

一人呟く龍人であった

「……………」

この二人は部屋の隅で沈んでいる

海斗はど貧民の為。

秋葉はレクスに勝てなかった為。

の字モードに入っている

ここいらで一つ。

レクスはどうやってトランプを持っていると思うが触れないでほしい。

この後も、全てのゲームに置いて海斗は惨敗した

スピード、ポーカー、ブラックジャック、ババ抜きetc……

その上全てのゲーム優勝者はクレナイと言うのは別の話である。

第七話 トランプ（後書き）

罰ゲームコーナー

海斗

「え？」

君が最下位ばかりだから

海斗

「俺言ってるないぞ！」

今作った

さあ罰ゲームルーレット……………スタート！

海斗

「鬼〜！！！」

トゥルルルルルル……………

決まった〜！

罰ゲームは……………次話出番少なめ！

海斗

「酷いわ！」

決定〜！

海斗は次話で本当に出番が少なくなります（笑）

第八話 戦前（前書き）

待たせた割には短いゼヨ

それもかなり短いゼヨ（汗）

すまんゼヨ（汗）

ネタ切れゼヨ（汗）

第八話 戦前

海斗が悲惨な眼に合っ てからかなりの時間がすぎた

なので今は夜

「さあ、始めるぞ！」

「何をよ（汗）」

海斗だけやたらとテンションが高かった

「そりゃあ……………枕投げに決まっ てんだろ！」

「「はあ？（汗）」」

「……………（汗）」

「マクラ……………ナゲ？」

呆れる二人に変な想像をしてちょっとゾツとしているレクス、何故

か発音出来たクレナイ。
反応は様々だった。

最後は反応と言っているのか分からないが（汗）

「また唐突に（汗）」

「恒例行事じゃんか」

「知らないわよ（汗）」

もう放っておきたい二人だった

「グル……………」

「ギャウ〜」

モンスター同士何かを話し合っている

ちょっと見てみよう

「グルアゝ」

「ギャウ？」

「グルッ……………グルア」

「ギャゝウゝ？」

「!!!／／／／／」

「ギャウ！」

全く分からない（汗）

だが言えるのは話が途中からそれているのはお分かりだろうか。

だが一番気になるのは何故レクスの顔が赤くなっただかである。

それはモンスターにしか分からない

そして――

「行くぞぉ！」

強制的に枕投げが始まった。

ルールはまず皆バラバラの部屋に移動、それから好きな場所に向かう。途中で出会ったらバトル開始、乱入あり、要するに何でもありというめちゃくちゃなルールである

まあいわゆるサバイバル枕投げである

とまあそんなどうでもいいバトルの火蓋が強制的に切って落とされた

第八話 戦前（後書き）

頑張るから許してくれゼヨ（汗）

クレナイ

「ギャウ」

ワシが全て悪いとは言え制裁はちょっと待つぜよ……………（汗）

クレナイ

「ギャ〜ウ〜」

ギャアアアアアアアアアアアゼヨ！

仁義無き枕投げ、開戦（前書き）

久々の更新ゼヨ

ちよつとネタに困ってるゼヨ（汗）

仁義無き枕投げ、開戦

突如として海斗の無駄な発案により強制的に枕投げを始める事となった龍人達

仁義無き？枕投げ、スタート

開始早々一分、ある部屋の前にて、

「今度こそ俺が勝つ！うおおおおおおお！！！！！！！！」

勿論戦っている相手は――

「
」

クレナイである

「おらあああああああ！！！！！！！！」

必死に連続で投げているが、

「ギャウ」

簡単に避けられている

「ちょこまかと！」

だが――

「ギャウー！」

クレナイはブレスを放った

「それ枕違………」

直撃

「ぎゃあああああああ！！！！！！！」

「ギャウ」

クレナイは満足そうに何処かへ向かった

海斗とクレナイのバトルが勃発した同時刻――

「今回こそ私が勝って龍人に甘えるのよ！」

「グルア」

此方は龍人を巡って争っていた

「くらいなさい！」

大量に枕を投げる秋葉

体が大きい為に避けきれない。

秋葉はそう踏んでいた

だがここで予想を覆す事が

「グルア」

なんと、全て受け止めていた

「嘘でしょ!？」

そして――

「グル〜ア〜！」

一斉射撃

「無理よこんなの〜！」

――此方龍人。

「誰も居ないなあ……………」

誰にも会えずにさ迷う龍人であつた

自分を巡って戦っているとも知らず……………

——ある大部屋

此処で対峙して居たのは——

「グルアアア」

「ギャウ」

そう、レクスとクレナイである

今は互いに敵同士、決勝戦？スタート

まずはクレナイの先制攻撃

「ギャーウ！」

いきなりブレスを放った！
枕使い枕（汗）

だがレクスはそれを、

「グルア！」

枕で打ち返した！

やりおるわ

「！！」

クレナイは飛んで避ける

だから飛ぶな（汗）
反則だろう（汗）

「ギャウ！！」

プレス連続発射

「グルアア！！」

全て打ち返す

最早枕投げじゃねえ（汗）

「グルアア」

枕乱れ投げ！

「
」

軽々と避ける！

やっと枕投げ？らしくなってきた……のか（汗）

次回、決着

仁義無き枕投げ、開戦（後書き）

新しく衝動に駆られて始めた方に集中するのでかなり遅くなるゼヨ

多分（汗）

仁義無き枕投げ大戦・後半（前書き）

予定を変更して此方を更新ゼヨ

龍人

「なんか嫌な予感がするんだけど……………」（汗）」

あながち嘘では無いゼヨ（笑）

龍人

「うわぁ……………」（汗）」

仁義無き枕投げ大戦・後半

前回、枕投げで

クレナイVS海斗

クレナイ勝利（卑怯とは突っ込まないで欲しい）

レクスVS秋葉

レクス勝利

龍人一人さ迷い

という結果になり今は、

「グルアアアア！！！！」

「ギャウ！！」

レクスVSクレナイ

まさに決勝戦？が始まっていた

暫くしてやっと枕投げらしくなって来た頃、龍人はと言うと。

「皆何処？（汗）」

そろそろ焦り始めていた

「何で居ないの（汗）」

段々と心が折れ始めた

「流石にしんだい……………（汗）」

その場に座り込み休憩を取った

「皆今頃バトルしてるんだろうな……………僕の予想は……………」

そして予想通りに物事が進んでいるなんて誰も知らない――

「なあ、組まないか？」

「な、何よいきなり（汗）」

あの後海斗と秋葉は合流した。

そして互いに敵意が無い事を伝えた。

「組んであの二匹を今度こそ倒すんだ」

と提案する海斗

だが

「嫌。組むならタツがいい」

「おい（汗）」

予想はしていた。

だがこうもハッキリと言われると少しは凹む。
海斗はそう思っていた。

（そんなハッキリ言っなよ……………）

落ち込む海斗

「まあ、しょうがないから組んであげてもいいけど」

結局どっちなんだ。

という海斗の心情は誰にも聞こえる訳が無かった。

その頃――

「グルアアア!!!!」

「ギャウ!!」

二匹は互角の勝負を繰り広げていた。

と、その時

「見つけた……………」

龍人が乱入してきた。

「グル？」

「ギャウ？」

何事？ みたいな顔をして龍人の方を向いた瞬間――

バシン

と音がした

「やった〜！ 当たった〜！」

二人の顔に枕が命中

「！？（汗）？」

「??？」

何が起きたのか分かっていなかった

「.....」

枕を見つめて

「「!!!!!!」」

何が起こったか理解したようだ

二人は一瞬顔を見てから

「グルア（汗）」

「ギャウ（汗）」

参りましたと言わんばかりに頭を下げる。

「え？」

どうすれば分からない龍人

その時、

龍人が倒れた

「グルア!?!」

「ギャウ!?!」

突然の出来事に戸惑う二人

だが戸惑いは直ぐに消えた

怒りとなって………

少し前に遡る

「ここだな」

そこはレクスとクレナイが戦っている部屋の前

「今度こそ倒すわよ!」

意気込む二人

「1、2の3でやるぞ」

「ええ」

構える二人

「1………」

「2の………」

「「3!!」」

扉を開け思いっきり枕を投げた

だが枕が命中したのは――

「い!？」

「嘘!？」

龍人だったのだ

主犯の二人を睨み付けるレクスとクレナイ

「まさか……………」

「タツがいたなんて……………」

啞然とする二人

「グルアアアッ！！！！」

「ギャウッ！！」

怒り心頭の二人

そして――

「グルアアアッ！！！！」

「ギャウー!!」

制裁の枕とブレス

二人に命中

こうして枕投げは幕を閉じた

あの後龍人に必死で謝って許して貰った二人だがレクスとクレナイには嫌われてしまった。

流石に皆疲れて眠りに着いた

波乱の一日がこうして終わった瞬間だった――

皆が眠りに着いた頃、

空を飛ぶ一頭の赤き龍

その上に乗る一人の少年の姿があった

仁義無き枕投げ大戦・後半（後書き）

龍人

「最後の誰！？」

それはまだ秘密ゼヨ♪

レクス

「グルウ……………」

気になるゼヨか

クレナイ

「ギャウ」

そんな事されても言えないもんは……………言えんゼヨ！

クレナイ

「ギャウ……………」

第九話 赤き龍と少年（前書き）

執筆方法を台本書きから変えたぜヨ

修正は――

多分するぜヨ

第九話 赤き龍と少年

翌日、

「うーん……………」

何時もの起床時間。龍人が眼を覚ます

「グルア」

既にレクスだけは起きていた

「おはよ、レクス」

「グルア」

因みに龍人の両親は龍人とレクスが出会ってから数年後、病気により他界している

「じゃ、いこっか」

「グルウア」

何時もの散歩に行こうとした時――

「……………（眠）」

クレナイ起床

「クレナイ、おはよ」

「グルア」

と言ったら

「おはよー……………」

喋った
完全に

「え？」

「グルア……………」

「今……………完璧に喋ったよね……………」

「グルア……………」

「……………へ？」

思考停止

龍人とレクスは一瞬互いの眼を見てから

「ええええーっ！っ！？？」

龍人は絶叫

「グルア……………（汗）」

レクスは啞然としている

「????」

自分が喋っている事に気付かず頭に？マークを浮かべてばかりのクレナイであった

河原――

「ハア……………（汗）」

「グルア♪」

今日も負けた龍人。

「負けちゃいましたね」

「何時も負けてるから――」

話してる途中に、

「グルアアア」

レクスに抱き着かれる

「／／／／／」

徐々に顔が紅くなる龍人

「顔が紅いですよ（笑）」

意地悪して龍人に言うクレナイ

「／／／／／」

更に紅くなる

「グルアッ」

お構い無しに更に抱き着くレクス

「／／／／／」

もう何も言えない龍人

「随分と嬉しそうですね」

その様子を見て言うクレナイ

暫くして

「そろそろ帰ろっか」

「グルア」

「賛成です」

皆帰ろうとしたその時、

「見つけた………」

「ガオ」

上空に赤き龍、その上に乗る少年

「グルア？」

その気配を感じ取ったレクス

「どうしたのレクス？」

「どうしました？」

レクスに聞いた瞬間――

空から赤き龍と少年が降りてきた。

「誰？」

少年に問う

「僕は……ラセ、神月ラセ。こいつは相棒のリオ」

「ガオッ！」

神月ラセと名乗る少年とその相棒のリオレウスのリオ。

この出会いが一体何を巻き起こすのか――

龍人とレクスとクレナイの運命は

そして神月ラセとリオの心情は――

運命のみぞ知る

第九話 赤き龍と少年（後書き）

へいモンスターハンター 赤き翼より神月ラセとリオゼヨ

神月ラセ先生ありがとうございますゼヨ

此からストーリーが展開していく……… 予定ゼヨ

第十話 知らされし事実（前書き）

モンスター達の心情は……………少しつまってしまっ たぜヨ（汗）

今回急展開ぜヨ

衝撃タツプリをご覧あれぜヨ

第十話 知らされし事実

神月ラセと名乗る少年とその相棒であるリオと出会った龍人とレクスとクレナイの三人

「お前が……………龍人か？」

「どうして僕の名前を？」

名前を知られている事に驚く龍人

「噂通り……………ティガレックスと一緒に暮らして……………ん？」

途中で言葉を止める

「！……………何故、こんな奴が、此処に居る！？」

クレナイを見て言う

「ぼ、僕ですか？」

「話せるのか！？」

更に驚くラセ

「この子は、昨日拾った卵から孵ったんだ。」

説明する龍人

「卵から……………孵った……………」

「ガオ……………」

復唱する

「……………ミラボレアス、名前に込められた意味は“運命の戦争”その亜種となれば尚更……………」

「……………」

沈黙するクレナイだが、

「僕は……………」

少しして口を開く

「僕の元々の名前がどうなのかは知りません。だけど今は“ミラボレアス”じゃなく“クレナイ”です！それに僕は戦う事は嫌いです……………」

「クレナイ……………」

「……………」

黙って聞くラセ

「それに、今は龍人さんとレクスさんの家族ですから……………」

「グルウ……………」

此処でラセが口を開く

「流石……………“絆”が強いな……………」

意味深な事を言うラセ

「どついう意味？」

質問する龍人

次のラセの言葉は衝撃だった

「……………お前達を、狙う奴等が居る」

「僕達を……………狙う？」

「嗚呼……。お前はモンスターと話せる……。数少ない人間。隣に居るティガレックスは人間の言葉を理解出来る数少ないモンスター……。そしてそのミラバルカンも人間の言葉を理解し話せる事が出来る更に希少なモンスター……………」

「……………」

あまりにも衝撃だった

まさか自分達がそんな特別な存在だったなんて――

「でも何でそんな事を？」

龍人が聞く

「……………僕とリオも、お前達と同じく奴等に狙われている……………」

「グルア！？」

更に衝撃の一言

「僕等は……………奴等がそんな事を話していたのを聞いて……………此处に来た。」

「……………」

次々と語られる衝撃の言葉に黙って聞く事しか出来なかった。

「……………安心して。僕が此処に来た本当の理由は、お前達と、手を組む為に来たんだ」

「手を……………組む？」

あまり意味が分からない

「……………直に奴等が来る、だからその前に……………」

あまりにも唐突すぎる

「まって。話が……………」

その言葉に少し顔をしかめるラセ

少し考えて――

「言い方を変える。僕達と、友達になってほしい。」

「友達？なら全然いいよ！ねえ、二人共？」

「グルア！」

「はい！」

快く承諾する三人

「ありがとう……………」

「ガオッ！！！」

一段落した所で

「——居たぞ」

全く聞いた事の無い声がした

「……………お出ました」

そう、“奴等”が現れたのだ

「あの人達……………僕等を狙って……………」

「お前達を……………殺す」

姿を表した奴等

奴等の狙いとは

龍人達の運命は――

誰一人として、分からない

第十話 知らされし事実（後書き）

段々シリアスに……出来るゼヨか（汗）

神月ラセ先生のパワーを借りて何とかするゼヨ

クレナイ

「他力本願ですか（汗）」

違うゼヨ（汗）

第十一話 初陣（前書き）

はい戦闘シーンありゼヨ（汗）

全く自身が無いゼヨ（汗）

改めて他の先生方が凄いと思ったゼヨ（汗）

いや、もう、攻撃方法がね（汗）

第十一話 初陣

現れた“奴等”

「お前達を——殺す」

「……………気をつけろ、彼奴等の本気だ」

ラセが忠告する

「ガオオオオオツ!!!!」

威嚇するリオ

「グルアアアツツ!!!!」

レクスも威嚇をする

二頭の龍の気持ちは同じだった

——大切な人を守る為に

今はその気持ちだけだった

「…………死ね」

奴等が武器を構えて向かってくる

「リオ！」

「ガオッ！！！」

ラセがりオの上に乗リラセを乗せて空を飛ぶ

「レクス！」

「グルアッ！」

龍人もレクスの上に乗リ空を飛ぶ

元々ティガレックスという種族は飛行能力はさほど無い。

だがレクスは少しは自由に飛べる事が出来た

「……………僕は戦う事は嫌いです。でも龍人さん達が殺されるくらいなら！」

クレナイも戦う事を決心した

「……………空を飛んだくらいで勝てると思うな」

奴等がそう言うとその場から高く飛び上がった

「凄いジャンプ力！」

「死ねえええ！！！」

だが奴等の攻撃が届く事は無かった

「……………忘れて無いか？リオレウスは空の王、空中戦は無敵だと言うことを」

そう、リオがブレスを放っていたのだ

焼け落ちる敵

「ちいつ……………」

思い出したかのように舌打ちする

「僕達も何かしなくちゃ……………レクス、何が出来る？」

レクスに聞いてみる

「……………」

考え込むレクス

因みにクレナイはブレスで応戦中

既に三人程命中している

「……………グルア」

「何かあるの？」

「……………分かった」

どうやら何かあったようだ

「……………」

ラセに近づき小声で話す

「……………危険だぞ、いいのか？」

「大丈夫」

「……………分かった。サポートする」

「ありがとう、レクス！行くよ！」

「グルア！」

話がまとまったようだ

因みにクレナイにはリオから伝えられた。

いったい何をするのだろうか

「何をするきだ？」

奴等も何をするか不思議に思っている、

「何？」

なんと、地上に降りたでは無いか

「バカめが！」

一斉に襲いかかる。
だが、

「……………させない」

「させません！」

「ガオッ！」

ラセ達を守る

「今だっ！レクス！ボイスッ！！！」

「グルアアアアアアアアアアッッ！！！！！！」

作戦とは間近でボイスだった

突然の事に対処出来なかった奴等はまともに喰らった

吹き飛んでいく者

鼓膜が破れ倒れる者

衝撃で心臓がやられる者

その衝撃は凄まじく回りにある木々はなぎ倒れ水や石が宙を舞う

その石を喰らい倒れる者も何名かいた

だが一番凄いのはそのボイスの発生源であるレクスの上に乗って耐えている龍人である

彼には何も被害が無かったのである

「……………凄いな」

「ガオ……………」

ラセもリオも同じ事を思っていた

——零距離で耐える奴は見たことが無い

長年色んな人達を見てきたラセとリオ

二人が元々居た世界ですら零距离で耐える人達が本当に存在しなかった

だが龍人はやり遂げたのである

「……………終わった？」

龍人は回りを見渡す

全員倒れていた

「……………やった！凄いよレクス！」

「グルァ♪」

レクスの頭を撫でる龍人

レクスは嬉しそうに笑顔になる

「……………凄すぎですよ」

一段落した所で

「……………どうしようか（汗）」

「……………死して屍拾うもの無し」

「それちょっと違うんじゃない（汗）」

レクスのボイスによって辺りは悲惨な状況だった

「コイツ等の正体が分かったが……………」

調べても何も出なかったのである

「まあ……………取り敢えず、僕の家に来ない？」

「……………そうさせてもらう」

「ガオッ」

奴等を退け一段落した龍人達

新たな親友、ラセとリオを連れて家に帰って行くのだった

でも、何か忘れてる気が……………

第十一話 初陣（後書き）

ラセとリオには引き続き登場して頂きますぜヨ（汗）

ラセ

「……………宜しくな」

リオ

「ガオッ！」（宜しくっ！）

まあ戦闘シーン如何ぜヨか？

楽しんで頂ければ幸いですぜヨ（汗）

ラセ

「……………もっと上手くなれ」

努力するぜヨ（汗）

第十二話 撃退後（前書き）

ちょっとシリアスが抜けるぜヨ（汗）

レクス

「グルァ
♪」

龍人

「前は疲れたよ（汗）」

でも元気そうぜヨな

龍人

「レクスはね（汗）僕は精神的に疲れたよ」

レクス

「グルァ
♪」

いや、ワシに抱き着くより龍人に……………

第十二話 撃退後

“ 奴等 ” を退けた龍人達

今は家に帰る途中である

「 ふ〜ん、ラセとリオはそういうふうにして出会ったんだ〜 」

「 …… 偶然が重なりあった “ 奇跡 ” ですネ 」

「 …… そういうお前達こそ “ 奇跡 ” の出会いだろう 」

互いの過去を話しあっていた

「 此も何かの運命なのかもね 」

「 …… そうだな 」

軽く笑い合っていたら

「 着いたよ 」

家に帰って来た

「 此处が …… 」

「 ガオツ (汗) 」

その大きさに少し驚く二人

「只今………って寝てるか（汗）」

自分につっこむ

「グルァ
♪」

「今日は起きて早々疲れましたよ（汗）」

家に帰って来て一安心するレクスとクレナイ

「本当に………広いな（汗）」

「ガオ（汗）」

まだ驚いたままの二人

「あははゝ（汗）やっぱりビックリするよね（汗）」

そんな会話を聞き付けたのか――

「……………どうしたの？」

「……………こんな朝早くから……………？」

ラセとリオの存在に気付く二人

「……………誰？」

「……………幻覚か？」

「……………龍人、誰だコイツ等？」

「ごたーいめーん」

「えっと……………どっちから先に言えばいいのかな（汗）」

少し予定外の事が起きてしまい焦る龍人

極めつけは――

「ガオッ」

「何！？」

「何だコイツ！？」

リオの存在

「ガオ」

リオは挨拶をしたただけなのだが――

「食われるゝ！」

「いやゝ！私美味しく無いわよゝ！」

この有り様

「ガオ（汗）」

「……………リオは人は食べない」

「二人共落ち着いて（汗）」

だが

「いやあああああ！！！！」

「うわあああああ！！！！」

半狂乱状態

「仕方無いなゝ（汗）レクス、軽めにボイスお願い」

「グルアアア！！！！」

ちよつと酷い気がするが

「「うゝん……………（汗）」」

眼を回す

「……………ちよつとやり過ぎだと思つが（汗）」

「ガオ（汗）」

「此ぐらいやらないと（汗）でも本当にレクスのボイスは本当に凄
いね（汗）」

「……………強力な、武器だな」

海斗と秋葉が起きるまで談笑しあっていた龍人とラセだった

因みに二人が起きるまで数時間掛かったという

第十二話 撃退後（後書き）

んと……………まあ、なんて言えばいいのかな

嗚呼、感想とか待ってるぞ……………

こんな感じでいいのか？

b yラセ

第十三話 これから（前書き）

遅くなったぜヨ（汗）

リオ

「ガオッ」（俺の出番ある？）

今回は………無いぜヨ

今回は人間メインゼヨ

第十三話　これから

あれから数時間後

「……………成る程な」

全てを話し終えた

「……………じゃあ此からもずっと命を狙われるって事？」

秋葉が尋ねる

「……………そうだ」

その質問にラセが答える

「よし！俺も戦うぜ！」

海斗がまた唐突に言い出す

「駄目だよ！危険すぎるよ！」

龍人は勿論反対する、

だが、

「じゃあお前はどんなんだよ？」

「僕？」

次に龍人にこう言った

「お前こそ危険じゃねえか！ラセつたっけ？そいつが居ても危険な事に変わりはねえ！いくらお前が反対しようとも俺は一緒に戦うからな！」

海斗の言葉に反論は出来ない

「それに……親友が危険な眼に合っているのをただ見て逃げたりするのは嫌いだ。」

海斗は齒をキラリと光らせながら言った

「私もよ」

横から声がした

秋葉だ

「私も一緒に戦う。反論は認めないわよ」

「海斗………アキ………」

友の優しさを改めて感じた龍人

「……………そろそろいいか？」

ラセが口を開く

「此からの作戦を発表する」

皆が息を飲んだ

「まずは暫くはこの家で待機だ。必ず近い内に奴等は攻めてくる。その時に返り討ちにして奴等の情報を聞き出す。暫く情報が集まったら、一気に攻め込む。そして奴等のボスを叩く」

ラセが作戦を具体的に述べた

「返り討ちってどうすればいいわけ？」

秋葉がまた尋ねる

「…………それは落とし穴とかを仕掛けたりしておく。それと今此処に閃光玉と音爆弾いう玉がある。それを使って奴等の視覚と聴覚を奪って攻撃する」

「つまりは肉弾戦って事か」

「そうだ」

分かりやすく説明する

「分かったわ、ありがとう」

お礼を言う秋葉

「……………作戦発表は終わり。後は準備だ」

そう言うトラセは立ち上がる

「んじゃ俺達も」

「ええ」

「うん」

「必ず勝つ!!」

気合い十分の皆

「……………中々、いい“友情”だな」

そう呟くラセだった

「……………の前にトイレ行ってくるわ」

「何だそれ（汗）」

一気に元に戻ってしまった

だが実は今この家に一頭の龍が迷い混んでいる事に誰も気が付いていないのだった

そう、レクスさえも気付かない龍が一頭――

第十三話 これから（後書き）

リオ

「ガオッ……………」（ホントに無かった……………）

次回はちゃんと出番作るぜヨから（汗）

リオ

「ガオ!?!」（まじで!?!）

努力はするぜヨ（汗）

第十四話 探険（前書き）

今回は俺視点なんだって！

ありがとうよ！

でもなんか嫌な予感がするんだが……………（汗）

なあ、どうなんだよ（汗）

今回は本当にリオ視点です

第十四話 探険

「ガオオオオツ!!!」

俺は今、ある龍と対峙している

それは少し前に遡る

俺はラセと一緒に龍人って奴の家に入った

んでラセが作戦会議するから待っててくれって言ってたから俺は待つことにした

……でも暇だった

「ガオ（汗）」

とりあえず俺は暇だから家の中を探索する事にした

俺は改めて思う

やけにこの家は広い（汗）
寧ろ広すぎる（汗）

まあ飛べるだけのスペースがあるから感謝だな

いきなり喉が渴いた

そついやあ俺何も飲んで無いんだっけ

何時からだろうか

忘れたが

俺は水を求めて動き回った

暫くして

台所が見つかった

「ガオッ！」

ラッキーだ

俺は翼の先にある爪で蛇口を捻り水の出ている所に顔を近付けて――

飲んだ

結構美味い

暫くそのままの体制でいた俺

流石に体制を保つのに疲れてきた（汗）

俺は飲むのを止め蛇口を捻り水を止めた

その時、何か書いてあったのに気付いた

——綺麗な山の天然の水から直送された美味しい水——

「ガオオ（汗）」

——何なんだこの家は（汗）

何処の豪邸だ（汗）

と突っ込んでみるものの誰にも聞こえる筈が無かった

水分補給を終えた俺は再び探索を開始した

本当に何なんだこの家は（汗）

なんで家の中に落とし穴があるんだ（汗）

しかも底には大量の棘があつたし（汗）

俺じゃなきゃ死んでるぜ（汗）

それにいきなり壁から矢が飛んできたよ（汗）

しかも毒というオマケ付きで（汗）

泥棒対策にしては返り討ちにする気満々だな（汗）

そんなこんなで罨を避けながら探索し続ける俺

「ガオ？」

何か見つけた

と思ったら

「ガオツ（汗）」

鏡だった

残念だ……

ただ一つ言わせてくれ……

「ガオツ！！！」

でかすぎるわ！

俺よりデケエじゃねえか！

何の意味があんだよ！？

とりあえずそんなでかい鏡に触れてみた

したら鏡がガタンと言う音と共に回転したよ……

勿論俺はバランスを崩した

その上後ろから鏡が押すように戻って来て……

突入

「ガアアアアアアア……」

段々遠くなっていくぜ……

まるでジェットコースターのように滑っていく

何度か頭をぶつけた

痛い（汗）

流れに身を任せ暫くすると

でかい部屋に出た

「ガオ？」

何だ此処は？

なんか機械の音がするし……

「ガオ」

何より暗い

とりあえず電気のスイッチを入れる

明かりがつくとそこにあっただのが――

謎の研究機械

「ガアアアアアアア！！！？？」

なんじゃこりああああああ！！！！？？

なんでこんな何処ぞのマッドサイエンティストが使うような機械が
あんの！？

何回も言っているが言わせてもらう

何なんだこの家は

一体なんに使うんだこんな糞でかい機械（汗）

ちょっと調べてみるか……………

俺は機械のスイッチを入れた

文字が浮かび上がってきた

「…………ガオ？」

日記？

続きをしてみる

——。月×日

今日はレクスとかくれんぼをした

レクスは身体はおっきいの隠れるのが上手かった

二時間探したけど見付からなかった

でもレクスの方が心配してか僕の前に出てきた

レクスが僕に謝ってきた

僕はどうすればいいか分からなかったからとりあえず

抱き着いてみた

一つ言わせてくれ…………

「ガオオオオオオオオオ！！！！」

俺のドキドキ返せええええええええええ！！！！！！

何だよ！

無駄に期待しちゃったじゃねえか！
俺バカじゃん！

つか機械が無駄にアレすぎるんだよ！

なんで日記にこんな大掛かりなんだよ！

とりあえず機械のスイッチを切った

部屋から出ようとしたら

また落とし穴が……………（汗）

なんでだああああああ！！！！？？

だから絶対俺じゃなきゃ死んでるから！

急いで部屋を出た俺

「ガオ……………（汗）」

疲れた（汗）

色んな意味で疲れた（汗）

速くアイツんところに戻ろう……………

「……………」

ん？

何だ？

「……………」

なんの声だ？

俺は声が聞こえた方向に向かった

段々と大きくなる

「ガルルルル……………」

今度ははっきりと聞こえた

「ガオツ！！！？」

声のする方を見ると

暗くてあまり分かんが眼が光っている

赤く、鋭く、俺を睨んでいた

「ガオオオオオオオオツツ！！！」

俺も睨み返す

「ガルアアアアアアアツツ！！！」

暗くて姿が分からない

が、俺はある推測を立てた

もしかして――

と、その時

「ガオ！？」

何かが飛んできた

俺はギリギリで避ける

飛んできた物を見ると壁に突き刺さっている

「ガオ」

直感した

当たれば死ぬ

俺は飛ばしてきた奴を見直す

「ガルルルル……………!!」

どうやら俺の様子を見ているらしい

俺は敢えてブレスを撃った

だが謎の生物はブレスを切断した

「ガオツ!？」

もう俺は確信した

ブレスのお陰で姿が見えた

今さっきブレスを切り裂き真っ二つにしたブレード

鋭く尖った棘

赤く光る眼

そう、迅龍ナルガクルガだ

——コイツはかなりキツイぞ

多分ラセでも手こずるだろう

だから俺は、

ラセと他の皆を守る為に、

「ガアアアアアアアッ！……！！……！！」

戦うと、俺は決めた

第十四話 探険（後書き）

リオ

「てか俺喋れていいのか？」

ラセ

「……………前書きと後書きだから、いいって言うてた」

リオ

「いいのか（汗）」

ラセ

「僕に聞かないで……………」

リオ

「だよな……………（汗）」

第十五話 赤き翼リオVS迅龍ナルガクルガ（前書き）

リオ

「完全にバトルだな」

ラセ

「リオ……頑張ってくれ」

リオ

「頑張るぜ！お前と彼奴等を守る為にな！」

第十五話 赤き翼リオVS迅龍ナルガクルガ

迅龍ナルガクルガ――

その速さと鋭い攻撃を見切れる者は殆ど居ない

出会えば死は殆ど免れられない

俺はそのナルガクルガと対峙している

「ガアアアアアッ！！！」

――何処から入り込んできたのかは知らない。

だが、今やる事はたったひとつ。

ラセ達を守る為に

「ガルアアアアアアアアアア！！！！」

戦う

「ガアアアアアアアアアア！！！！」

「ガルアアアアアアアアアア！！！！」

バインドボイス

これを喰らわせた方が戦いの流れを掴む

だが互角だった
中々決まらない

だから俺はバインドボイスを中断してプレスを放った

「ガオオオオオ！！！！」

だが流石は迅龍、一瞬で反応して避けやがった

「ガア」

やっぱり一筋縄じゃいかねえか

と考えていると――

「ガルルルルッ！！！！」

ブレードで切り裂いてきた

「ガアアアアアッ！！！！」

俺はブレスを放ちながら後ろに下がる

だがやはり切り裂かれていく

「ガルルルッ！！！」

ブレードが眼の前まで迫る

「ガアアアアアアアアアアッ！！！」

俺はやけくそでバックジャンプしながらブレスを放った

「ガルウッ！？」

どうやら予測してなかったらしくまともに喰らった

「ガアアアアアアアア！！！！」

俺は此を期にブレスを連続で放つ

「ガルアアアアアアアッ！！！」

最初の一撃が効いたらしくブレードで切り裂かれていくものの数発は切り裂けずに喰らっている

「ガルアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！」

どうやら怒ったらしい

赤い眼光が更に光りを増す

「ガルアアアアアッ！！」

刹那、ナルガが消えた

否、尋常じゃないスピードで動いている

赤い眼光の軌跡が恐ろしく残る

影さえ着いて来ない程の速さ

「ガルアアアアアアアアッ！！！！！！」

叫んだ瞬間、眼の前にはブレードがあった

「ガアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

俺はなんとか爪で相殺した

衝撃が伝わる

相殺した方の爪が衝撃で少し痺れる

「ガアアアアアアアア！！！」

俺はブレスを放つも易々と避けられる

「ガルルルル……………」

ナルガも俺も一旦距離を取る

——どうすればいい

プレスは避けられるか切り裂かれる

接近戦では向こうが上

殆ど勝ち目が無い状態だ

「ガLLLLLLLLッ！！！」

また棘が飛んで来る

どうすれば――

そうか！

俺は一つ作戦を思い付いた

殆ど賭けだが

「ガアアアアア！！！」

俺は棘を避けながらナルガに尻尾を振って挑発する

「ガルアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！」

よし！乗った！

「ガルアアアアアアアアアアッッッ！！！！！！」

俺の予測通りナルガはブレードを展開して切り裂いてきた

「——ガアアアッ！！」

——今だっ！

ガキイイイイン！

という甲高い音がなり響く

俺はナルガのブレードを爪で相殺して挟み込んだ

「ガルアアアアアアアアアア！！！！！！」

必死に抵抗するが俺は離すつもりなどない

「…………ガアアアアア（汗）」

ふう…………（汗）

疲れて身体があんま動かねえ…………

ちょっと休むか…………

俺は疲れてその場に座り込んで、眼を瞑った

——— 守る事が出来た

彼奴等を、

ラセを———

俺は守る事が出来た、

大切な、親友を

大切な、

相棒を――

第十五話 赤き翼リオVS迅龍ナルガクルガ（後書き）

リオ

「めっちゃ疲れたんだが（汗）」

ラセ

「お疲れ様……………リオ……………」

リオ

「も、もうヘトヘトだ……………（汗）」

ラセ

「ゆっくり……………休め……………」

リオ

「そうさせてもらっぜ……………」

ラセ

「……………僕も、リオみたいに強くならなきゃ」

第十六話 語られる過去

リオとナルガの戦いが終わる頃――

ドガアアアアアアアアン！！！！

という凄まじい爆発音がした

「な、なんだあ！？」

「なんなのよおゝ！？」

秋葉は驚いて腰を抜かしてしまった

「この声……………リオ！！」

ラセは気付いたようだ

「場所は……………こつちだよ！」

龍人が皆を先導する

「彼処だよ!!」

そこは黒煙が立っていた

リオのフルパワーブレスの黒煙だ

「リオ!!」

リオを見付けたラセはリオの元へ駆け出す

「ガオオ……………（汗）」

かなり疲労している

「……………そうか、助けに来れずにゴメン」

「ガオオ……………」

リオが翼でラセを宥める

「ありがとう……………リオ……………。ゆっくり休めよ……………」

「ガオ……………」

リオは返事をして眼を閉じた

「……………一体何が居たんだろう」

黒煙が晴れる

皆言葉を失った

「まさか……………」

「コイツは……………」

「なんなの……………」

「……………」

秋葉以外口を揃えて言った

「「迅龍、ナルガクルガ……………」」

「でもなんでこんな所に……………」

「一体何処から入って来たのかしら……………」

「僕も気付かなかったぞ……………」

皆はどうやって、何時入り込んできたのか考える

その時、

「ガルル……………」

「「!!!!!!」」

ナルガが起き上がった

「ヤバいぞ……………」

皆構える

「ガルルル……………！」

ナルガも構えようとした

けどナルガは構えるのを止めた

「え？」

「な、何？」

そしてナルガは驚きの行動に出た

「ガルアアアアアッ！！」

なんと海斗に飛び付いた！

「え……………？」

「ええ……………？」

「……………？」

「一体何？」

「あ、ああ……話すぜ……」

俺が幼稚園ぐらいの頃、家族で森にキャンプに行ったんだ
家族皆でな

森に着いて皆でテントを建てたりキノコを集めたりしたさ

初日はそれだったな……

其から数日後の事だ……

「見つかるかなあゝ」

俺はカブトムシとか色んな虫を探しにいったんだ

すると何か黒いのが蠢いてたんだ

「何だろう……」

俺は少し怖かったが好奇心が勝ってて身体が勝手に近付いてったんだ

そこに居たのが――

「……………血？」

傷だらけで倒れていたコイツだったんだ

「……………ガルアッ！！」

その時、俺に向かった物凄い殺気立っててな、俺はびっくりしてこけたよ

「だ……………大丈夫だよ……………？僕……………君に何も知らないからね……………」

「ガルアアッ！！」

その時、コイツは俺に飛び掛かろうとした

俺はその時、殺されるって思った

怖くて眼を瞑った

でも暫く経っても痛みを感じない

コイツが眼の前で気力無く倒れたんだ

「……………大丈夫？」

俺はもう一回聞いてみた

「ガルア……………」

一番痛むらしき場所を抑えながら俺に威嚇してきた

「そこが一番痛いのか？」

「……………」

しまった、という表情をして顔を伏せる

「……………僕が治してあげる」

その時持ってた消毒液を傷口に吹き掛けた

「……………ッ！！」

かなりしみたらしくもう片方の腕で俺を攻撃してきた

「痛っ……………！！」

衝撃で少し吹き飛ばされたよ

「…………ガルアッ」

近寄るな、とでも言うように睨み付けてきた

でも俺は近付いた

治したい一心で

「大丈夫だよ……………」

俺はそう言いながら治療を続ける

「……………」

コイツも安心したのは分からないが攻撃して来なくなったよ

暫くして傷口を持ってたタオルで覆い――

「終わったよ」

俺は立ち上がりコイツにそう言った

「…………ガルア」

コイツは俺に礼を言うかのように頭を下げた

「いいよ、怪我は速く治さなくちゃいけないからね」

俺はその時笑顔だったんだろうな

コイツも笑顔で返してくれたよ

「あ…………そろそろ戻らなきゃ」

空は既に茜色に染まっていた

「じゃあ…………またね」

俺はコイツに別れを告げて家族の元へ帰った

「……………」

コイツは静かに見送ってくれた

「また…………会えるといいね……………」

俺はそう呟きながら走り始めた

過去を語る海斗

「そんな事が……………」

皆驚いてばかりだ

「ああ…………でもまさかまた会うとは俺も思ってたぜ」

染々となる空気

「でも結局何で此処にいる理由にはならないわよ」

秋葉が最もな事を言った

「もしかしてと思うが……………」

ラセは何か分かったようだ

「コイツはお前を追いかけて来たんじゃないのか？」

海斗に問う

「そうなのか？」

その海斗がナルガに聞く

「ガルア」

そうだよ、というふうに返事をする

「やっぱりお前を追いかけて来たみたいだな」

「みたいだね」

龍人は少し笑う

「どうするのよ？」

「うぬ……」

考え込む海斗

「………せっかくまた会えたんだ、俺はコイツとも一緒に暮らすぜ」

「ガルアツ！！」

思い切り抱き着くナルガ

「レクスみたいだね（汗）」

苦笑いする龍人

確かに行動がレクスとそっくりだ

龍人だからこそ分かるのだが

「僕は反対はしない………寧ろ歓迎だな………リオもそうだろう？」

「ガオ」

「私も良いわよ」

皆賛成のようだ

「お前等……………」

海斗は飛び切りの笑顔になる

新たに、迅龍ナルガクルガが仲間となった

この再開が

どうなるのか

誰にも分からない

だが、

必ず何か

意味があるのだろう

そしてこの再開は

強い絆の証なのだから――

第十六話 語られる過去（後書き）

新たな仲間のナルガです

ナルガ

「ガルア」

名前は次回

どんな名前か明かされます

期待はしないでちょ（泣）

そして後は前書きの通り……………（泣）

第十七話 決戦準備（前書き）

えゝ

ナルガの名前が発表されまし

募集してないけど（汗）

募集すればよかったと後悔してます（汗）

んと、御覧くださいまし

第十七話 決戦準備

ナルガと海斗の出会いの過去が明かされてから一時間後――

「ガルアッ」

「おもい……………（汗）」

ナルガが海斗に上から乗り掛かっている状態が続いていた

「シャドウ、重い……………（汗）」

「ガルアッッ」

このナルガにはシャドウ、という名前を付けたようだ

だが肝心のシャドウはお構い無しに乗っている

「重そうね（汗）」

「かなり重いぞ（汗）」

「……………だがホントは嬉しい癖にな」

「ガオ」

「……………／／／」

当たっている

だから反論出来ない海斗

「僕と殆ど同じだね（汗）」

「グルア」

「ですね（汗）」

龍人は苦笑いしか出来ない

因みに龍人も海斗と同じ状況だ

更に言うとレクスとクレナイは三話ぶりの登場になる

「龍人………何とかしてくれ（汗）重い（汗）」

だが、

「慣れるから大丈夫だよ（汗）」

冷たい

冷たいぞ龍人

「グルア〜♪」

レクスは龍人の頭の上に顔を乗せて乗り掛かっている

更にその上にクレナイが乗っている状態だ

一体どれだけの重さが掛かっているのだろう

想像も出来ない

「…………ガオ」

「…………どうしたリオ？」

リオは少し考えて――

「ガオ」

皆と同じ事をした

「リオ……………」

その表情は全く読み取れない

「ガオ……………」

「そうか……………」

ラセは顔を隠しているがきつと顔は赤くなっているだろう

「ハハハ……………（汗）」

と、全員集合した所で

「え〜と…………何するんだっけ（汗）」

「どへーい！！（汗）」

皆そろって綺麗にずっこける

「話聞いてたのか？（汗）」

「全くよ（汗）」

「ごめん（汗）ホントに忘れちゃった（汗）」

「おい（汗）」

大丈夫なのか（汗）

かなり心配になる

「…………（汗）ま、まあ準備を始めるぞ（汗）」

「おお〜（汗）」

どうしても調子が狂ってしまった

「ガオア？（汗）」

「グルア（汗）」

「ガルア（汗）」

「さあ……………（汗）」

会話を想像してみてください

と、まあ準備をし始める

リオがやたらと掛かりかけた落とし穴――

リオがギリギリで避けた毒を塗った矢――

リオばかりだが（汗）

着々と準備を進めていく

そして――

「出来たー！！！」

完成した

「後は奴等が来るのを待つだけだな……………」

「そうだね……………」

準備は終わった

後は決戦のみ

奴等は来るのか

来てもらわないと違う意味で困るが

決戦の時は――

近い

第十七話 決戦準備（後書き）

ふおおおおお（汗）

リオ

「どうしたんだこの作者は（汗）」

いやゝ、此から前書きと後書きはゲストの君達二人に必ず出てもらおうかなと（汗）

ラセ

「何故だ？」

……………（汗）

何となく（汗）

ラセ

「（汗）」

リオ

「駄目だろ（汗）」

いいのさ（汗）

多分（汗）

ラセ

「どっちだ（汗）」

知らん！
(汗)

第十八話 衝突（前書き）

眠い…………

無理矢理身体起こして急ピッチで仕上げたから文章もヒドス…………

（汗）

ラセ

「……………何やってんだか」

リオ

「俺に聞くなよ（汗）」

第十八話 衝突

「奴等はこの中か？」

「そうだ。ただ気を付けろよ」

「分かっている」

そう、奴等だ

どうやら無線で誰かと会話しているようだ

「期待しているぞ……………」

この無線の者は一体何者なのだろうか……………

「此より突入する。十分気を付けろ」

「「はっ！」「」」

「外から声がするよ……………」

いち早く気付いたのは龍人だ

「……………本当だ」

「……………遂に来たのね」

「……………気を引き締めて行くぞ」

そして――

バガアアアアアアアンと言う音と共に、

「突入ー！！捕まえ――」

突入して来た奴等

だが、龍人達の姿は無い

「やけに静かだな……………」

数名が玄関から乗り出した

すると、

ガコンという音がした

「え……………?」

下を見る

「「ギヤアアアアアアアアア……………」」

段々下に落ちていく

勿論下には

グサツグサツ!

針の山

「くつ……………畏か!?!」

気付くのが遅すぎた

「その通りだよ〜ん!?!」

この声は……………

そう、海斗だ

「貴様は誰だ!?!」

「俺かい？お前等に名乗る必要は無い」

すると海斗の身体から無数の棘が飛び出す

「ぐわああああああ！！！」

棘は心臓や脳、首に命中した

次々と倒れていく。

「まだまだ行くぜ！」

更に数が増える

だが奴等とて黙ってはいない

「ふん、単調すぎるわ」

盾を取り出しガードをする

だが、

「安心すんのは速いぜ？」

ニヤニヤしながら言った

すると奴等の顔色が変わり始めた

「ま、まさかっ！？」

そう、あまりの衝撃に盾が耐えきれず砕け始めていた

「そんなバカな——」

「はい、ドーン」

盾は炸裂して砕け散っていく

その間を棘が通り抜け、命中

声なく倒れていく

「どーだ？」

見ると大量の死体で溢れていた

「しっかし疲れたぜ（汗）なあシャドウ？」

「ガルア（汗）」

種明かしをすると、

戦いが始まる前にシャドウから大量の棘を補充、そしてシャドウが棘を発射すると同時に海斗も棘を投げる

という事だ

「海斗すごいや」

「あんなにやれるとはねえ」

「…………強いなんてもんじゃ無いぞ」

皆驚く

「誰が変わってくれ」（汗）疲れた」（汗）」

「ガルア（汗）」

戻ってきた二人

「お疲れ様」

「お疲れ様」

「頑張ったな……………」

「いや」（照）」

「ガルア（照）」

一緒だ

何もかも

「じゃあ次は私がやるわ」

と言つて秋葉が行つた

秋葉の實力は如何なるものなのか――

第十八話 衝突（後書き）

頭が痛いから寝る（汗）

ラセ

「おい（汗）」

リオ

「ホント何やった（汗）」

前書きの通り

ラセ

「……………（汗）」

リオ

「……………（汗）」

第十九話 秋葉の実力

遂に攻めて来た奴等

「次！！第三、第四舞台突入！！」

指揮官らしき男が言う

そして突入して来た

だが、

「「うわあああああああ………」」

またもや落ちていく馬鹿が数名

グシャグシャッ！

と変な音がしたのは気のせいだろう

「行くぞ！！」

穴を避け進んでくる奴等

「そつは行かないわよ」

後ろを見ると秋葉が立っていた

「なんだあ？女か？」

油断する奴等

「女だからって嘗めない方がいいわよ」

すると笑っていた奴等が倒れて行く

「何だ！？この女何をした！？」

「さあ、何でしょうね」

不敵に笑いながら言う

「やっちまえ！！」

突っ込んでくる奴等

それに対して秋葉は、

お玉を取り出した！！！！

「お玉……………」

ラセは突っ込まずに要られなかった

「でもね」

龍人が言う

「アキとあのお玉を嘗めない方がいいよ……………」

その表情は深刻だった

秋葉を見ると、

「この程度なのね……………」

死体の山が出来ていた

「んなっ……………」

「ガオオオオ!!!!??」

ラセトリオは驚きを隠せない

「アキはね……………」

次に出てきたのは衝撃の言葉だった

「極道の一人娘なんだ……………」

「嘘だろ……………（汗）」

「ガオオオ……………（汗）」

更に驚く

「それにあのお玉は……………ダイヤモンドだろうと安々と破壊するんだ……………」

「……………」

「……………」

もう声も出ない

「極道の血がアキを魔王にさせる……………今のアキは……………無敵だよ……………」

「俺も何度殺されかけたか分かんねえよ……………」

秋葉の方を見る

来る敵来る敵どんどん果てて行く

秋葉は息すら上がって居ない

秋葉の猛攻はひたすら続く

流石の奴等も畏れをなしてきたらしい。

徐々に数が減っていく

「どうしたの？掛かって来なさいよ」

もう、

魔王だ

「うわああああ！！！」

奴等は逃げ出す

だが、

「逃がさないわよ」

玄関に居た奴等は次々と倒れる

「い、一体何をした……………」

生き残った一人が聞く

「只、針を投げただけよ」

針をキラんと光らせ見せる

「ま、魔王だ………！」

逃げ出したが、

「残念賞」

瞬く間に倒れる

「凄い………（汗）色んな意味でも凄い………（汗）」

「ガオ（汗）」

どうやらこの二人には“恐怖”として映ってしまったらしい。

怯えている

「僕達でも未だに恐ろしいんだよ（汗）」

「もう………眼がな………（汗）」

明らかになった秋葉の実力

龍人達必要無いぐらいまでに強い

「疲れたから休むわ（汗）後宜しく」

第十九話 秋葉の実力（後書き）

ラセ

「……………（汗）」

リオ

「……………（汗）」

固まっていますネ

ラセ&mp・リオ

「「秋葉怖え（汗）」」

第二十話 赤き翼の龍と最強の少年（前書き）

ええーと……………

なんか……………アナザー番的なもんを造ろうかと思ってまし（汗）

主にこの友情と絆、そして心情のちゃんとしたキャラ設定を書こうかと思っております

そして没ネタとなった物も書こうかと……………（汗）

それで皆様の意見を頂きたいのです……………（汗）

如何でしょうか？（汗）

ラセ

「無理だろう、この作者には」

リオ

「俺達の元々の作者なら大丈夫だが……………ラセの言う通り、この作者には無理だな……………」

二人共酷ス……………（泣）

第二十話 赤き翼の龍と最強の少年

「疲れたわ（汗）」

その声と共に秋葉が帰って来る

「お、お帰りなさいませ……………（汗）」

「ガ、ガオオオ……………（汗）」

ラセとリオが頭を下げながら恐れ多く言う

「ねえ海斗……………」

「嗚呼、そうみたいだな……………」

小声で会話する龍人と海斗

二人は分かった

——この二人は秋葉に“恐怖”の二文字としてしか認識出来なくなっている、と

「????」

当の本人はそんな事も知らず呑気な顔をしている

「次は誰が行くんだ？」

何とか引き戻そうと海斗が本題を引っ張る

「……………次は僕とリオだ」

（よし……………）

作戦が成功して心の中でガッツポーズをする海斗

「行こう、リオ」

「ガオッ」

ラセとリオはさっきの事が無かったように戦場となった玄関へ向かう

その頃、

「第三、第四舞台もたった一人の女により壊滅！！」

伝令係らしき男が伝える

「女だと？」

確認する指揮官らしき男

「は、はい……………」

何かに怯えるように答える

「我々は女にすら容赦無き組織…………… 奴等は相当の手練れか……………」

実際は甘く見て返り討ちに遭っていたなんて分かりはしない

「まあいい、第五、第六部隊を突入させろ」

「はっ！！」

次の指示を出して無線を取り出す

「——此方ブラッツ」

『どうした……………？』

指揮官の男はブラッツ、と言うようだ

無線の相手はかなり威圧の籠った声をしている

「実はかなり苦戦しててな…………… 援軍が欲しい」

『お前が苦戦するとは…………… 珍しいな。直ぐに手配する』

「すまないな……………」

そう言うと、無線を切る

「此で奴等も終わりだ……………」

不敵に笑うブラッツ、
一体その援軍とは……………

「来るか……………」

「ガオオオ……………」

二人共構えていた

長年の勘というやつなのか、
空気が変わった事を感じ取った二人

「何時でも来い……………!!」

「ガオオオ!!」

そして――

「進めー!!」

やって来た

「行くぞ！！リオ！！！！」

「ガオオオオオッツツ！！！！！！」

「行くぞ！！」

ラセ&リオVS第五、第六部隊

戦闘開始、

「ガオオオオオオオッツツ！！！！！！」

「ぐうつ！！」

リオの先制バインドボイス

大半の奴等は耳を抑え蹲った

その瞬間、ラセは突っ込んだ

「ハアアアアッツ！！！！」

何処から取り出した白く輝く剣と黒く輝く剣を両手に持ち、

斬る

「ぐうつ!?!」

ズシャッ、と肉の斬れる音がする

「ぐわっ!?!」

「うつ!?!」

「うばあゝ!?!」

次々と倒れて行く

それは、一撃で絶命していく証拠だ

「ガアアアアッ!?!?!」

リオも只見ているだけでは無い

ブレスを人が固まっている部分に放つ

そしてそれは命中、爆風で回りも巻き込まれる

「ガアアアアッ!?!?!」

間髪入れずにブレスを撃ち込んで行く

奴等は声を上げる暇も無く灰となって散り失せる

「ハアアアアアアッッ！！！」

「ガオオオオオオオッッッ！！！！！！！！！！」

奴等は次々に死んでいくのを見て戦意を喪失し始めていた

だがそう思ったのも束の間、リオのブレスが放たれる

「！！！！」

何も出来ぬまま被弾、

その後からラセが斬りに掛かる

「ハアアアアアアッッ！！！！」

全く隙が無い

そしてラセが最後の一人の命を斬る

「此が……………伝説の赤き翼の龍と白黒の双剣を持つ少年の……………」

最後まで言い終える前に散っていく

「……………ふっ」

「ガオ」

一段落した事でその場に座る二人

「……………川原で戦ってた時より強くない？」

「グルア（汗）」

「でも見た感じではまだ本気では無いですよ」

「「嘘お！？」」

クレナイの言葉に驚きを隠せない三人

「ラセとリオってホントに何者何だろう……………伝説がどこのどこの
言ってたし……………」

「さあな」

その時、ラセとリオはと言うと、

「お疲れ様、リオ」

「ガオオオ……………」

ラセがリオの頭を撫でていた

嬉しそうな顔をするリオ

「ガオ」

「えっ……………」

今度は逆にラセの頭をリオが撫でる

「リオ…………… / / / / /」

「ガオ…………… / / / / /」

リオも実は恥ずかしいのだろう

二人共顔が真っ赤になっている

「そろそろ、戻ろつか……………」

「ガオオオ……………」

ラセとリオが龍人達の所に戻るまで顔が赤かったのは言うまでもない

そして垣間見た二人の実力

奴等の一人が死に際に放った伝説とは一体なんの事なのだろうか

全
て
は
……
謎

第二十話 赤き翼の龍と最強の少年（後書き）

ラセ

「／／／／／」

リオ

「／／／／／」

まだ赤いなあwww

此からもつと二人にハバラアツ！！！！

ラセ&p・リオ

「「止める……………」」

ぐふう……………

なんてな

ラセ

「何だと！？」

リオ

「無傷！？」

フハハハハ！！！！

奥義作者特権さ！！ｗｗｗｗｗｗ

ラセ

「コイツ…………最強だろ……………」

リオ

「勝てる気しねえ……………」

大丈夫

君達には危害は加えないから

加えるなら……………君達の敵にするから♪

ラセ&p・リオ

「「怖いな（汗）」」

第二十一話 命は大切に（前書き）

サブタイトルは明らかにウケねらいですよ（汗）

ラセ

「……………なにやってんの（汗）」

ごめん（汗）

マジで今回丁度いいサブタイトルが思い付かなくて……………（汗）

リオ

「俺達が手伝ってやるよ」

いやいやいやいやいや！！（汗）

君達にそんな事させられないって！！（汗）

ラセ

「考察ぐらいなら手伝っても……………」

だから駄目だと言っに（汗）

君達にはバトルがまだまだ控えてるんだ（汗）

こんな事させてらんないんだよ（汗）

リオ

「そうか……………」

その気持ちは受け取っとくからさ

ホラ、彼処に料理創ってあるから食べてきな（汗）

ラセ

「いいのか？」

勿論

リオ

「なんか悪いな（汗）」

いいのさ

おっと長くなりましたが（汗）

ラセ&mp・リオ

「何時もの事だろ」

確かに（汗）

それでは――

ラセ&mp・リオ

「「どうぞ」

先に言われました（泣）

第二十一話 命は大切に

「第五、第六部隊まで壊滅!!」

「むう……………」

次々とやられ、顔をしかめるブラッツ

「……………第七、第八部隊を出動させる」

「はっ!!」

今は此しか出来なかった

（このままでは……………）

ブラッツの頭には不安しか残らなかった

「お帰り」

ラセとリオが帰ると龍人達が待っていた

「只今……………／／／」

「ガオ」

ラセの顔が少しばかり赤いのは気のせいだろうか

それもその筈、何故ならリオがラセに寄り掛かっているような状態だからだ

その事が嬉しくて恥ずかしい故に顔が赤いのだった

「お疲れ様」

「二人共強いな」

「ガルア」

「強くないと………リオを守っていけないから………」

「ガオオオオオオ………」

リオもラセと同じ事を言っているように聞こえる

「次は僕達だね」

「グルア」

「ですね」

気合いを入れる三人

「頑張れよ!!」

「ガルア！！」

「負けないでね！！」

「……………勝って戻ってくると信じてる」

「ガオ！！」

仲間達に見送られて、龍人、レクス、クレナイは戦場へと向かった

その頃、

「第七、第八部隊突入準備！！！」

「はっ！！！」

突入準備に入っていた

「お前達の部隊が最後だ。気を引き締めろよ」

「はっ！！！！」

「それでは——」

「いよいよだね」

「グルア」

「緊張してきました……………（汗）」

「僕も……………（汗）」

どうもシリアスな雰囲気が出ない

正確には出ていない

「グルアアア」

「レクス……………」

「レクスさん……………」

緊張を和らげようと二人を撫でるレクス

「ありがと、レクス」

「ありがとうございます」

と、その時、

「うらああああっ！！！」

遂に最後の二つの部隊が攻め込んで来た

「来た………行くよ！！！」

「グルアアア！！！」

「はい！！！」

龍人&レクス&クレナイVS第七、第八部隊、戦闘開始

「うおおおお！！！」

武器を構えて突っ込んでくる

だが単調すぎて、

「さようなら」

クレナイのプレスをも口に喰らう

プレスが被弾した事により爆発、数人爆発に巻き込まれ、塵となった

「レクス!!」

「グルアアア!!」

レクスは、自身の持つ強大な爪で、奴等を次々と切り裂いて行く

「やああああっ!!!!」

龍人は、何処から取り出した刀、刀というより太刀と言った方がいいだろう。を振るい奴等を一閃、命を斬る

「彼奴……太刀なんて代物持ちやがって……（汗）」

「あんなのあつたんだ……（汗）」

全く知らなかったらしい

そんな会話が聞こえる

だがそんな会話も、今の龍人達には聞こえない

聞こえる筈が無い

段々と増える奴等

「クレナイ!!」

龍人が何か合図をした

クレナイは首を縦に振って、奴等にブレスを一発お見舞いしてから
後ろへ下がった

「レクス!!行くよ!!」

「グルアアア!!」

構えるレクス

「今だ!!全員突っ込め!!」

奴等はチャンスと言わんばかりに突っ込んで来る

だがそれは作戦だった

「——今だよ!!フルパワーボイスッ!!」

「グルアアアアアアアアアッッ!!」

川原で戦っていた時に見せた、あのボイス

再びボイスにより凄まじい衝撃が空気を何度も振動させる

悲鳴を上げるがレクスのボイスにより全く聞こえない

宙を舞うのは、敵、敵、敵

大きく吹き飛ばされ後ろで耳を抑えている者達と衝突、

衝突した事により耳を塞ぐ物が無くなり鼓膜が裂ける

吹き飛ばされはしなかったものの凄まじい衝撃により倒れていく者も何名かいた

「此処まで聞こえるぞ（汗）」

「五月蠅いわね（汗）」

「ガルア（汗）」

耳を塞いでないと裂けそうで怖い

それはシャドウも直感した

元々ナルガクルガは聴覚も発達している、故に逆に刺激をされると弱い

だからシャドウは一番困っていた

「終わった……………」

レクスのボイスが終わる頃、龍人が回りを見渡す

「誰も……………居ない」

「じゃあもしかして……………」

そう、そのもしかしてだ。

ボイス一つで全てが風ぎ払われたのだ

そしてそれは、この家での戦いの終わりを意味した

「終わった〜（汗）」

「グルア（汗）」

「疲れましたよ（汗）」

背中合わせに座り込む

「でも、何か嫌な予感がするんだよね……………」

「グルア？」

「いや……………気にしないで」

だが龍人の予感はずぐに現実となって現れる事になる

第二十一話 命は大切に（後書き）

ラセ

「あの……………」

ナンダイ？

リオ

「何だあの太刀は（汗）」

あれは後々判明しまする

ラセ

「なんだろ……………」

リオ

「俺速く知りたい……………」

なんなら未来へ一緒に行く？
俺未来にちよいと用事あるし

ラセ

「行けるの！？」

リオ

「マジで！？」

作者に不可能は無い（笑）

ラセ

「何でもありか（汗）」

リオ

「ある意味怖いぞこの人（汗）」

ほら速くしないと置いてくぞ

ラセ

「ヤバイ、あの人マジだ（汗）」

リオ

「みたいだな（汗）」

それじゃあ出発

ファッ！！

ヒュン……

ラセ&リオ

（（ホントに行けたー！！（汗）））

第二十二話 零（前書き）

まあ今回で奴等の正体と目的が分かる訳で

ラセ

「まだあるだろ」

リオ

「あの龍人が持ってた刀の正体もだろ」

その通り

やっちゃいました（笑）

ラセ

「やっていいのか……………（汗）」

リオ

「俺知らね（汗）」

知らなくて結構（笑）

ラセ

「それより何だ、その刀は？」

んあ？

此すか

俺が考えたオリ武器さ

リオ

「お、オリ武器？（汗）」

うい（笑）

名前は………

無限刀「霸斬」

ラセ

「また微妙なネーミングセンスだな（汗）」

だから俺に求めるなと言うに（汗）

リオ

「俺達も人の事言えねえけどな（汗）」

まあ暇なので考えてみたオリ武器

試し切りしよーっと

ラセ

「此処でやるなよ（汗）」

リオ

「俺空に避難（汗）」

行くぜ!!!

斬!!!

ラセ

「嘘だあ（汗）」

リオ

「コイツ空間切り裂きやがった………（汗）」

俺は基本どんな武器でも使えるんだよ

その中で一番得意なのが太刀なのさ

空間切り裂く事ぐらい容易いぜwww

ラセ

「いや明らかにやり過ぎだろ（汗）」

リオ

「無茶苦茶すぎるわ（汗）」

第二十二話 零

その刀、刃は紅と黒に鈍く光輝く

その刀、一閃すると白く煌めく

その刀、側面に、文字が彫られている

—— 天上下天下無双 ——

その刀は、

天上下天下無双刀、

伝説の中の伝説

この世に語り継がれる最強の刀

その刀を、

「ふう……………（汗）」

龍人、という平凡な少年が持っている

「龍人さん、そういえばその刀は一体……………？」

気になったのでクレナイが聞いてみた

「これ？これはね…………お父さんから譲り受けたんだ」

実は、この刀は昔からこの家に代々受け継がれてきたのだ

「この刀は、守りたい者の為に使いなさい」そう言われてきたんだ。そして、今がその時、だから僕はこれを使ってるんだ」

両親の事を思い出しているのだろう、少し悲しい表情をする龍人

「……………」

レクスは黙って聞いていた

「だから僕は、負けない」

その確固たる意思、そして決意

凄まじいものを感じ取れる

「龍人さん……………」

クレナイも理解したのだろう

真剣な表情になる

だが、

「おゝい!!」

直ぐに表情は元へと戻る

「皆!!」

皆がやって来た

「お疲れ様……………」

「疲れてるだろうけど、もう少し頑張れるか？」

心配して聞く

「まだ大丈夫だよ」

この言葉に安心したのか表情が和らぐ

「後は外に居る奴だけだぜ」

「速く終らせましょ」

「そうだね」

「行くぞ……………」

ラセの言葉に皆覚悟を決め、外へ向かった

「第七、第八部隊も全滅!!」

「くっ……………!!」

齒軋りするブラッツ

もう残っているのは自分と伝令係だけだからだ

「糞っ!!」

そう言いながら、乱暴に無線を引っ張る

「おいまだか!？」

そして返って来た返答は、

『すまない、今は誰も居なかった……………援軍は……………無理だ』

「んな……………」

返って来た返答に失望して無線を落とす

「残念だったな、もう終わりだ」

後ろを向くと

「お前が……今回の騒動の犯人だな？」

ラセが問う

「くっ……………」

最早四面楚歌の状態だ

逃げ出す事は出来やしない

「糞があああっ！！！！」

ブラッツは自棄糞になり武器を取り出し龍人へ突っ込む

「死ねええええええええええ！！！！！！！！！！」

だが次の瞬間、

ブラッツは声も無く吹き飛ばされる

「タツに近付かないでよね」

瞬時に秋葉がブラッツを吹っ飛ばしたのだ

ブラッツは着地の衝撃に耐えられず

その命を失った

秋葉のパワーがそれほど凄まじい事を物語っている

「おい!!」

ブラッツが吹き飛ばされた時に無線を拾った海斗が無線に向かって
叫ぶ

『…………成る程、あのブラッツが殺られたか』

不敵に笑っているように聞こえる

「お前等は一体なんだ!? 何故俺達を狙う!？」

誰もが知りたかった

奴等の正体、

そしてその目的

『我々は…………零、目的は…………この混ざり合い腐りきった世界の
破壊、そして新たな世界の創造だ……………』

遂に判明した奴等の正体、そして目的

「そうか、いずれ俺達が邪魔になるから消そうとした。そうだろ?」

海斗が威圧を籠めて言う

『その通りだ……………』

だが相手は全く怯む様子は無かった

『今お前達の居る場所から北に向かえ、何もない荒野……………我々はそので待っている……………我々とお前達、そこで決着を着けよう。安心しろ、罠などは仕掛けない。我々は、実力で叩き潰す……………日時は何時でも、待っているぞ……………』

そう言い終えると、無線が切れた

「……………此処から北に向かった荒野で待っている、だとよ」

海斗が無線で聴いた事をそのまま伝える

皆沈黙

誰も口を開こうとしなかった

ただ一人以外は、

「……………行こう」

龍人だ

「行って、全部終わらせよう」

龍人は決めたのだ

全てを

大切な者達を守る為に

「……………ハッ！！何を今更、行くに決まってる！！」

「私もよ。何処へでも行くわ」

「……………僕は奴等を倒す為に此処まで来たんだ。今更怖がっても意味がない」

全員のその眼は、光輝いている

全てを終わらせる為の意思を籠めて

「皆……………」

改めて一人一人の顔を見て言った

「よし！！今日はゆっくり休んで、明日、決着を着けよう！！いい？」

「「おおー！！」」

こうして、遂に決着の時が近づいて来たのだった

龍人達は零に勝てるのか

そして零の実力は――

如何に

第二十二話 零（後書き）

ラセ

「ここの作者のキャラ紹介をしよう」

リオ

「なんで急に（汗）本編全く関係無いぞ（汗）」

ラセ

「本編よりもここの作者の存在が気になる」

リオ

「それは確かに（汗）」

ラセ

「確か此处に……あつた。これだ」

作者：究極神団^{バカ}

年齢15～17歳

バカ

頻繁に暴走する

故にツッコミ役が必須

そのバカな脳内では新キャラやオリ武器、オリモンスターを考案中

小説のネタや内容も同時進行で話を進めて行く程のバカっぷり

かなりの感動屋で涙脆く、表情の変化が激しい

バカなので時間や空間などを操る事が出来る

バカ故に誰もがやらない事をやる

何でもあり

不死身

バカ

リオ

「バカしか書いてねえ（汗）」

ラセ

「駄目だこれ（汗）」

リオ

「本当に何者だよ（汗）」

ラセ

「僕達の作者に聞くしか無いな（汗）」

俺はトップシークレットだwwwwww

リオ

「あの設定見る限りバカの間違いだろ（汗）」

そうだったwww

トップバーカレットだwww

ラセ

「何だそれは（汗）」

知らんwww

突然だが前書きに載せた無限刀「霸斬」を一名様にプレゼントしちゃいますwww

誰もいらんと思うけどなwww

第二十三話 休息（前書き）

はい

（笑）路線だけど笑えるかどうかはご自身の判断に委ねます（汗）

ラセ

「シリアスぶち壊し……………（汗）」

リオ

「いいのかよ（汗）」

いいのさwww

後君達にも笑って貰いますwww

ラセ&mp・リオ

「え？（汗）」

笑えるかどうかは知らんが取りあえずどぞwww

ラセ

「どういう事!？」

リオ

「教えろよ!！」

（ ^ω^ ）をつをつをつをつ

第二十三話 休息

零との決着を着ける為に今日は休息を取る事にした龍人達

「しかし……ある意味凄いな（汗）」

「本当に（汗）」

そう、

あれだけの騒ぎだと言うのに誰一人として近くに居ない

そして今、何をしているかというと、

「此どころにかしなきや（汗）」

敵の死体が溜まった玄関の清掃中だ

血が完全に固まっている所もありかなり苦戦している

「幸いにも臭くねえからまだましだな」

「ラセに感謝しなきや」

最初は死体が腐って悪臭を放っていた

だがラセが偶然にも持っていた消臭玉という物を使ったら一瞬にして臭わなくなったのだと

「偶然だよ……………偶然」

と、言うが

「まさかぁ。ホントは狙ってたんじゃないのか？」

疑う海斗

どうやらラセは今ので標的にされたいらしい

「ち、違う……………（汗）」

「またまたー。本当の所どうなのよ？」

「だから違……………（汗）」

秋葉にもターゲットにされてしまったラセ

ただただ焦る事しか出来ない

その様子を見て、

「止めなよ二人共（汗）」

龍人が仲裁に入る

だが、

「龍人は今は関係ねえ。ラセに聞いてんだ」

「そうよタツ、今はラセに聞いてるのよ」

「……………（汗）」

二人の身体からなにかどす黒いオーラが出ている

「う……………（汗）」

龍人にも見えたのだろうか、

そのどす黒いオーラが

そして何がこの二人を豹変させているのだろうか

「「さあ！！」」

同タイミングでラセに尋問する

だがその表情は笑っている

「……………プツ！？」

笑いながら迫り来る二人に我慢出来ずに吹いてしまった

「そこで笑っ！？」

龍人の鋭いツッコミ、

だが、

「だって笑いながら迫って来られたら誰でも我慢出来ないって（笑）」

完全に落ちたようだ

「え？（汗）」

嫌な予感

後ろを向くと

「……………ぶっ!？」

アッホな顔をして迫り来る海斗と秋葉の姿が

流石にこの不意打ちに龍人も吹いてしまった

「びょうびゃひゃひゅひょ？」

「にゃかにゃかによみよんでいしょ？」

アッホな顔をしながら喋っている為に言葉になっていない（笑）

「それ反則（笑）」

「もう漫才コンビとして生きて行けばいい（笑）」

ラセのボケに全員が笑う

「何だよ（笑）」

「だが断る！（笑）」

「断るなよ（笑）」

「二人なら大丈夫だよ（笑）」

「「酷い（笑）」」

暫く龍人達の回りには笑いが溢れたという

その頃、

モンスター達は……

「「……………」」

何故かにらめっこをやっていた（汗）

何故ににらめっこ（汗）

「「……………」」

さあ、バカな顔をしているのを想像してみよう！！（笑）

「「……………」」

戦況は変わらない

此処でリオが行動に出た

「……………がおっ」

ジュワッ、とても言いたげな顔に変更した

「……………ブッ!!」

全員吹き出した

「ガオオオオツッ!!!!!!」(笑)

優勝、リオ(笑)

「もう無理です(笑)」

「グルア(笑)」

「ガルア(笑)」

「ガオオオツ!?(笑)」

どうだ!?

と言わんばかりに腰?に手?を当て高らかに咆哮する

「……………がおっ」

ワンモアー（笑）

「ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

全員の腹筋が崩壊したもよう

やった本人ですら大笑い

そして、暫くモンスター達の回りにも笑いの渦が巻き起こっていた
と言う

その夜――

「いよいよだね」

「嗚呼、遂にだな」

「決着の時は……」

「近づいて来たわね」

もう覚悟は決めた――

今、此処に居る皆と一緒に居る為に、守る為に、覚悟を決めた――

「明日、全てに決着を着けよう」

「ああ！」

「うん！」

「そうだな」

最後に確認しあい、

眠りに着いた

――

「我々が、勝つ。そして、我々の目的を果たしてくれよう………諸君、全力で、叩き潰すのだ」

「ハッ……！」

零の方も本気だ

見るからに（見えないが）ヤバそうな者達、

龍人達は全て打ち破る事が出来るのか、

そして、零の真の実力とは――

第二十三話 休息（後書き）

(^ ω ^) を つ を つ を つ を つ を

ラセ

「確かに笑って……（汗）」

リオ

「笑ってるなあ……（汗）」

君達の笑つてゐる所が無かつたから笑わせてみたのさwww

かなり難ったけどな（汗）

まあ上手く書けたかは皆様の判断に委ねるとしよう

さて、お知らせにありんす

ラセ

「何だ？」

多分暫くこの友情と絆が集中更新されるぜ

理由は……極秘扱い
WWW

リオ

「教えろよ（汗）」

駄目です
W
W
W
W
W

さて、オリ武器でも考えますかな

ラセ！リオ！
手伝って！！

ラセ
「ええ！？」

リオ
「何で！？」

君達のその優秀な頭脳を借りたいのだよ

それにラセの持ってる武器はオリ武器だし

報酬は………
ゴニョゴニョ………

ラセ
「乗った」

リオ
「俺も」

よし！！早速工房へレッツゴー！！

ラセ&mp・リオ
「「おおー！！」」

因みに報酬は秘密♪

第二十四話 両者対面（前書き）

あ？

寝てたから遅くなっちまったよコンチクショ―

ラセ

「機嫌悪そうだな……………」

リオ

「俺頭痛いんだが（汗）」

ラセ

「大丈夫かりオ？」

リオ

「大丈夫だ……………ちょっと騒ぎすぎただけだからな……………それより……………」

ラセ

「うわぁ……………（汗）」

ん！

あ！

ごあっ！

ファッ！！！！！！

ラセ

「もっ……………人間じゃないね（汗）」

リオ

「だな（汗）」

ラセ&mp・リオ

「空間叩き割ってるよ（汗）」

アジャア!!!

第二十四話 両者対面

翌日、

「行こつか」

龍人達は、決着を着ける為に北へ飛び立った

因みに

龍人はレクスに

海斗はシャドウに

秋葉はラセと一緒にリオに乗っている

龍人曰く、

レクスの飛行はちょっと危ないから二人乗るのは危険

だということなので飛行能力が一番高く危険のないリオに乗せて貰った

クレナイはまだ小さいので誰かを乗せて飛ぶ事は出来ないが飛行能力はリオに劣らないくらいまで成長している

暫く飛ぶ事数時間

「彼処かな……………」

何もない荒野

そんな所に数人立っていた

「降りてみよう……………」

全員はそれに黙って頷き後に続く

「来たな……………」

ボスらしき男が呟く

その視線の先には影が四つ

そして――

「着いたね……………」

「ああ……………」

両者、対面

「ようこそ……………そして初めまして。」

ボスらしき男が挨拶をする

「私の名は無限、我々零の頂点に立つ者だ……………」

「アンタがボスって事ね」

「如何にも」

睨み付ける秋葉を無視して喋る無限

「此処までわざわざ来て頂き礼を言う。さて、分かっていると思うが……………我々とお前達、決着を着けよう」

「……………」

最後の言葉に物凄い殺気と威圧感を籠める無限

その事を感じ取り構える龍人達

「さあ………始めよう………どちらが勝つか………」

その言葉で後ろに居た四人が前に出る

「「来い!!」」

全員が武器を持ち構える

一人は大きな剣、大剣を

一人は大きな鎚、ハンマーを

一人は槍と盾、ランスを

一人はボウガン、と呼ばれる物を

それぞれ持つて構えた

龍人達も武器を改めて構える

「その前に我々の最強の仲間を紹介しよう………」

何かを呼ぶかのように笛を吹く

すると地響きがし揺れる

「うわっと!」

あまりの揺れに転けそうになる

「あ、アレ!」

秋葉が何かに気付く、

視線の先には

山より大きな何かが居た

「あ、アイツは……………」

「知ってんのか!？」

「アイツは……………」

その謎の何かとは

「老山龍、またの名を、岩山龍、ラオシャンロン……………」

ラオシャンロン、それは太古より生きる山より大きな龍

基本はただ歩くだけだが、そのただ歩く行為が天災に匹敵する程

そんな恐ろしい龍を、零は従えているのだ

「勝てるのか……………」

此処まで来てラオシャンロンを見て不安になる海斗

「分からない……………」

ラセにも分かる筈がない

だが、

「それでも、僕は諦めない、僕は負けない」

龍人は臆せずに言った

その眼は負けの二文字が映る事のないぐらいに

輝いている

「……………だよなあ！！こんな所で諦めるなんてどうかしてたぜ！！」

「そうね。負ける訳にはいかないわ！！」

「……………だな」

龍人の一言で不安が吹き飛ぶ

「さあ！！今こそ決着を着けよう！！この戦いに！！」

遂に始まった零との決戦

龍人はこの戦いに勝つ事が出来るのか――

第二十四話 両者対面（後書き）

あゝあゝ

此方放送席

ラセ

「何やってんの（汗）」

いやさ

最近睡魔に勝てる気しねえからさ

リオ

「関係ねえと思っんだが（汗）」

ですよね

龍人

「作者さんネジさらに外れたんじゃない？（汗）」

あい！！

ブツ壊れました！！！！！！wwww

ラセ

「笑い事なのか？（汗）」

リオ

「まず違うな（汗）」

龍人

「此が作者さんだからどうにも出来ないよ（汗）」

あ、あゝ

半分ネタ切れだあゝwww

ラセ&リオ&龍人

「それは駄目だろ！！」（汗）「」

第二十五話 決戦、そして決着 VS 零（前書き）

一話になってしまった……

ラセ

「何でだ？」

さあ……（汗）

リオ

「おいおい（汗）」

まあ一つ言っておく、

今回で

第一章

が終わります

ラセ

「へ？」

リオ

「は？」

そのまんまさ

第二十五話 決戦、そして決着 VS 零

遂に斬って落とされた零との決戦

果たしてラオシャンロンを撃ち破り決着を着ける事が出来るのか

「シャドウー!!」

「ガルア!!」

まずは先制攻撃

シャドウが棘をラオシャンロンへ向けて飛ばす

だが、

キーンという音がしたただだった

「何い!?!」

「その程度、ラオシャンロンには効かぬ」

笑いながら言う

あまりにも堅い甲殻故にダメージが無かった

「リオ!!」

「ガオツ!!」

今度はリオがブレスを放った

だがそれもただ触れて爆発しただけでダメージが無い

「ガオツ!?!」

リオも驚きを隠せない

「生ぬるいぞ若造……………」

そうは言いつつ先程と表情が違う……………
何かあるのだろうか……………

「レクス!!」

「グルア!!」

レクスはそこら辺あった岩を吹き飛ばした

だがそんな岩すら弾いてしまった

「堅すぎるって!!」

「グルア（汗）」

片方で耳を塞ぎながら武器を手に取りガードをする

「動けるのか」

「耳が痛いからあんまり動きたくないだけ」

「成る程な……………」

ラオシャンロンのバインドボイスが収まる

「今度は此方の番だよ!!」

龍人が無限に攻撃する

だがそれは何かに阻まれた

「!？」

何かに阻まれ後ろに下がる

「私には届かぬ……………」

一体何が阻んだのだろうか……………

「さあ、解いてみよ!!」

無限が龍人を狙う、

だがそれは背後からの攻撃により止められる

「ん？」

後ろには

「ハッ！俺達も居る事忘れんなよ！！」

「そうよー！！」

「忘れて貰っちゃ困る……………」

海斗、秋葉、ラセが居た

そして何故か秋葉の武器がハンマーになっていた

「彼奴等はどうした？」

無限が問う

「彼奴等か？彼奴等はおたくの龍の声で伸びちまってるぜ」

海斗が指差した先には海斗が言った通り伸びていた

「……………バカ共め」

呆れながら吐き捨てる

「まあ私に攻撃が届く訳が無いがな」

挑発するように言う

「やってみなきゃわかんねえよ!!」

一斉に攻撃を仕掛ける

だがやはり何かに阻まれる

「クハハ……………」

攻撃が届かない
いくらやっても

だが、

「？」

一瞬だけ無限の回りが光った

（なんだろ……………今の）

それが見えたのは龍人だけだった

「さあ、今度は此方の番だ!!!!」

その頃、

「グルアアアアッッ！！！！！」

「ガルアアアアッッ！！！」

「ガアアアアアッッ！！！！！」

ひたすらに攻撃していた

レクスは爪で

シャドウは尻尾で

リオはブレスで

それぞれ応戦していた

そしてクレナイは力を溜めていた

何をするのだろうか……………

「オオオオオオッッッ！！！！！」

ラオシャンロンがタックルをしてきた

その一歩毎に大地が揺れる

それを辛うじて避ける

——拉致があかない

三頭はそう思っていた

しかし、

「皆さん離れて!!速く!!」

クレナイが三頭に言う

不思議な顔をしながらラオシャンロンから離れる

すると、

キイイイイイイイン……

遙か上空から音がする

それも一つだけでは無かった

少しして、

「!!!!!!?」

ラオシャンロンは背中に傷みを感じた

それもかなりの衝撃を

「どうです！？効かない訳がありませんよ！！」

そう、隕石だ

隕石が雨となつて大量にラオシャンロンに降り注ぐ

「オオオオオオッッッ！！！」

痛みで声を上げる

「ガアッ！！」

「ガルアッ！！」

「グルアッ！！」

この隙にブレスや棘や岩で攻撃する

「当たれ！！！」

クレナイもブレスを放つ

「オオオオオオッッッ！！！」

身体中に隕石が降り注ぎ横から棘やブレスや岩が飛んでくる

段々とダメージが入っていくのが誰から見ても分かる

ラオシャンロンは痛みには耐えきれず横に横転した

「今です！！あのお腹に攻撃してください！！」

そう言いながらクレナイはブレスを放つ

「ガアアアアッツッ！！」

リオは空高く飛び足の爪で切り裂く

「ガルアアアアッツッ！！」

シャドウは尻尾の棘を全開にして叩き付ける

「ゲルアアアアッツッ！！！！！！」

レクスは爪に全力をつぎ込む力一杯切り裂いた

「オオオオオオオッツツッ！！！！！！」

ラオシャンロンの腹からは大量の血が吹き出る

「止めます！！」

最後に一斉攻撃

「オオオオオオオオオオオオオオオオ……………」

ラオシャンロンの声が段々と小さくなり、収まった

「ガル……………？」

「ガオ……………」

「グルウ……………」

「……………」

互いに顔を見合い

勝利を確認し、その場に座り込んだ

ラオシャンロンが倒された頃、

「はあああああつっ!!」

龍人達と無限は先程から何も変わらなかった

それどころか龍人達の息が上がって来ていた

「そろそろ終わりにしよう……………」

無限が構える

すると衝撃波が発生した

全員衝撃波をまともにくらい吹き飛ばされる

「どうか……私の力は……」

龍人に近付く無限

「ぐっ……」

龍人はなんとか起き上がる

「止めだ——」

無限が龍人を切り裂こうする

「間に合え!!」

海斗が棘を投げる

「だから効かないと言って——」

グサツ、と鈍い音がした

「!!!!!!?」

ダメージを受けた事に驚く無限

「!!?」

驚いたのは無限だけでは無い一番は無限だろう

「何故だ………?」

ふと回りを見渡す

すると居たのは、自分以外だけだった

レクスもクレナイもシャドウもりオも、全員揃っていた

「まさか——」

ラオシャンロンの方を見る

「くっ!!」

齒軋りをする無限

「ラオシャンロンは倒れた!!お前の負けだ!!」

ラセが無限に降伏するように言う

「黙れ!!」

自棄になり斬りかかる

「はああああ!!!!」

ラセも接近する

「死ね!!」

武器を振りかぶった、だが海斗と秋葉により止められた

「はああああっ!!!!」

ラセは無限をめちゃくちゃに切り裂く

「ぐおおおおおっ!!!!」

叫び声を上げる無限、

「はあっ!!」

フィニッシュを決めた

だが血だらけでまだ立っている

「止め!!」

龍人が最後に一刀両断する

縦に真つ二つになった

断末魔など聞こえない

「勝った……………」

勝った

それはこの戦いの終わりを告げた

「勝った……………の？」

「勝った……………んだよな？」

皆確認しあう

そして歓喜に包まれた

「「勝ったああああ！！！！」」

と、大声で叫ぶが、皆座り込んでしまった

よほど疲れたのだろう

秋葉と海斗は空を見上げている

レクスとクレナイとシャドウはハイタッチをしている

リオはラセの隣に座りラセと何かを話している

話が終わったらしく、

「龍人」

ラセに呼ばれる

「……………ありがとう」

急に頭を下げるラセとリオ

「え？へ？」

何の事が分からない

「お前達のおかげで、仇討ちが出来た。本当にありがとう」

「ガオ」

仇――

一体何があったんだろう

そう思ったがその思いを何処かに置き、

「どういたしまして」

と言った

その時、

地面が大きく揺れ始めた

「！？」

突如として始まった揺れ

そして――

キュイイイイイイイン！！

目の前に空間が開いた！！

「何だよあれ！？」

その空間は辺りを吸い込み始めた

「何これ！？」

踏ん張る皆

だが抵抗虚しく皆空間に吸い込まれてしまった……

そして龍人達を吸い込み終えた瞬間、空間が閉じた……

龍人達は一体何処に吸い込まれたのだろう

そして何故空間が出来たのだろう

この空間の先は――

そして全ては――

不明

第二十五話 決戦、そして決着 VS 零（後書き）

リオ

「まてまてまてまてまてまて！！！！（汗）」

ラセ

「どついう事だ！？」

だから第一章終了だつて……………

ラセ

「なんで言わなかった！？」

だつてそつちの方が面白いじゃん

リオ

「俺達何処に飛ばされんだよ！！！！？」

それは秘密っ♪

驚かれた方も少なからず居る筈

まだまだ続きますよー！！

第二十六話 ある雪の中で（前書き）

場所がもろばれなのが……

ラセ

「（汗）」

サーセン（汗）

リオ

「…………（汗）」

さあ今回はめちゃくちゃ短いですがどうぞ（汗）

第二十六話 ある雪の中で

敵組織、零を壊滅させた龍人達

だが安心したのも束の間、謎の空間が現れ、その空間に吸い込まれてしまった

一体何処に飛ばされたのだろうか……

暫くして

「う……ん……」

龍人が眼を覚ます

「此処は………?」

見渡す限りの雪、雪、雪

「寒っ………」

今頃気付いたらしく、身体を震えさせる

「そうだ！！レクスは！？皆は！？」

辺りを見回す

だけど皆の姿が無い

「別々に飛ばされちゃったのか……………」

龍人は寒いのを我慢して皆を探し始めた

唯一残っていたのは太刀だった

それを背負い雪の中を歩き進める

「皆……！！何処……！？」

必死に大声を出して探す

だが誰一人として返事が無い

その代わりに龍人の声を聞き付けたのか、

「ギャオ、ギャオ」

白い鱗を持った者が何体か現れた

「あれは……………」

眼を凝らして見てみる

「ギャオ」

白いランポス、ギアノスだ

「ギアノス……………」

ギアノス達は龍人に飛び掛かる

「おっと」

龍人は難なく避けるが足場が雪に覆われているためにあまり遠くには避けられなかった

「ギャオ」

ギアノス達は白い何かを吐き出した

「くっ!!」

龍人は上に飛んで避ける

だが、

「ギャオ!!」

「!？」

——フェイント

一頭だけジャンプしてきたのだ

「ぐあっ!！」

龍人は攻撃しようとしたが、間に合わず喰らってしまった

「ギャオ」

追い討ちと言わんばかりに白い何かを吐きつけた

「くっ………身体が………」

白い何かを受けた事により身体が徐々に凍り始めた

雪の中の寒さとギアノス達による攻撃、
龍人はそろそろ限界だった

「くっ………」

ギアノス達が食べようとしている

ギアノスの牙が迫る、

その時、

「ギャオ」

ギアノス達が逃げ出した

「……………」

回りを見回すと

「ブオオオオオオオ！！！！！！」

空から白い獣が現れた

「……………」

白い獣は龍人を見て外敵と判断し攻撃してきた

——— 殺られる

そう思った

だが、

「グルアアアアアアアアアアアッッ！！！！！！！！」

聞こえたのは懐かしい声だった

「レク……ス……？」

その姿を確認した龍人は、意識を闇へ手放した

あれから更に時間が経った

「ん………」

龍人は再び眼を覚ます

「グルア！！」

龍人が目覚めた事に喜び龍人に飛び付くレクス

「レクス……………」

龍人も笑顔になる

「そう言えばレクスと出会ったのも雪の中だったよね」

「グルウ……………」

あの日の出来事を思い出す二人

「ありがとう、レクス」

「ゲキユウ……………」

再開する事が出来た龍人とレクス

そして二人は再び絆を改めて強くしたのだった

それは、場所が違うが、二人が出会った、

雪の中の事だった――

第二十六話 ある雪の中で（後書き）

ラセ&・リオ

「……………」

いいのか悪いのか分らん（汗）

ラセ

「まあ……………いいんじゃないのか？」

リオ

「だな、俺はいいと思うぜ」

おまいら……………

嬉しい事を言ってくれるねえ

今回から少しの間別々の視点になりますので……………

へい短くなる訳で……………（汗）

それでも宜しくお願い致します

第二十七話 ある深き木々の中で（前書き）

見ての通り木々が立ち並ぶ場所です（汗）

ラセ

「サブタイトルにいいの思い出せないんだって？」

そうなんだよね……

リオ

「ファイトとしか言えない俺（汗）」

サーセン（汗）

ネタはある

問題はサブタイトル……

んだコレ（汗）

ラセ

「変わってるな（汗）」

存在が異質だからなあ俺は

リオ

「俺みたいに転生でもすんのか？」

寧ろそうなりたいわ俺あ

おめえらが羨ましいぜ……

ラセ

「ああ……僻んでるな……此は……」

リオ

「まあ……放っとくかw」

ラセ

「酷いなw」

リオ

「だってよお、お手上げじゃん(汗)」

ラセ

「確かに(汗)」

第二十七話 ある深き木々の中で

謎の空間に吸い込まれた龍人達

どうやら別々に飛ばされた事が判明

龍人は雪の中でレクスと再開し再び皆を探し始めた

その頃、遠く離れた場所で

「おう……………」

海斗が眼を覚ます

「此処は……………何処だ？」

回りを見渡す

あるのは力強く立ち並ぶ木々

だがそれなりに光が届いている

「皆何処だ？」

辺りを探す

だが龍人同様誰も居ない

「ちっ…………離れ離れになっちまったか……………」

小さく舌打ちをしてから歩き始めた海斗

少し歩くと

「な……………」

其処には回りの木よりもとてつもなく巨大な樹がまるで王者が君臨するように立っていた

「デッケェ……………」

その樹の長さは測れるのかと言うほど長い、長い、長い

「おっと、立ち止まってる場合じゃねえ」

海斗は急いで樹の中へ搜索しに行った

樹の中もやはり広く首が痛くなりそうな程だった

「広いな……………」

暫く樹の中を見ていると

「クエツ」

何かの鳴き声がした

「何だ？」

鳴き声が聞こえた方を見ると

「クエーツ……！」

其処には眠鳥、ヒプノックが居た

「ヒプノックか……………」

ヒプノックは非常に臆病な性格――

なのだが

「クエーツ……！クエーツ……！」

「っ……！」

執拗に攻めていた

動きが速い

戦い慣れているようだ

海斗は中々攻撃出来ずにいた

「この糞がつ!!」

海斗は大きく後ろに下がり棘を投げ付ける

「グエツ!!」

棘はクチバシに命中した

「どうだ!？」

だが――

「クエエエエツ!!」

ヒブノックは攻撃を受けた事に物凄い怒った

クチバシからは水色の吐息が漏れる

「もう一発!!」

海斗はもう一発投げる

だがそれは避けられる

しかもスピードが尋常じゃない

「速いつ!!」

海斗は完全に背後を取られた

そして――

「クエエエツ!!!!」

即効性の睡眠ブレスを諸に受けてしまった

「しまっ……………」

急激な眠気が海斗を襲う

海斗は抵抗も出来る訳が無く眠りに落ちた――

「クエーッ!!!!」

止めと言わんばかりにクチバシを突き刺そうとする

その時、

「なーんてな」

海斗が起き上がった!!

そしてヒブノックを切り裂く!!

「グエエエエッ!!」

ヒブノックは驚きを隠せない

「俺も速さには自信があつてな、避けさせて貰ったぜ」

とは言つもののその心中は穏やかな物では無かった

そつ、武器である棘を使いきってしまったのだ

(どうする俺……)

と考えていると

「クエッ!!」

ヒブノックがクチバシを突き刺そうと走ってきた

「危ねえ!!」

それを右に避ける――

だがそれは失敗だった

「ぐふう!!」

海斗はフェイントに引っ掛かったのだ

回避した先から尻尾が攻撃してきたのだ

諸に受けてしまい壁に激突する

ヒブノックは今度こそクチバシで突き刺そうとした

（身体が……動かねえ……）

骨が何本か逝ったらしく動く事が出来ない

海斗は死を覚悟した

ヒブノックのクチバシが眼の前まで迫る

刹那、

「グエエエエツ……！」

ヒブノックが切断された

「!？」

其処に見ゆるは、

「ガルア！」

片腕を上げているシャドウの姿があった

「シャドウ……………」

海斗はシャドウを見て安心したのか、痛み能耐えきれなくなったのか、意識を手放した

第二十七話 ある深き木々の中で（後書き）

さあ最近戦闘描写がやたらと増えてきた……………

なので真面目に誰が何の武器を使っているかを説明します

龍人〃太刀

海斗〃棘↓??

秋葉〃鎚

ラセ〃双剣

龍人の達は前に説明した通り天上天下天地無双刀

ラセは原作の通りのあの双剣

海斗は……………ネタバレしますが大剣の予定

秋葉の鎚はいずれ明かします

ラセ

「此よりキャラが増える事は？」

……………あるな

リオ

「まじ？」

うん

どんなのかは秘密

ラセ

「こっそり教えてくれ」

リオ

「頼む」

………（汗）

後でね（汗）

今は無理だから（汗）

ラセ

「よし」

リオ

「誰なんだろうな………」

まあ………かなり近いな
出会う時は

ラセ& a m p・リオ

「「は？」」

第二十八話 カVS力（前書き）

さあ今回はニューキャラの登場です

ラセ

「一体だれなんだろう……………」

リオ

「気になるなあ……………」

知りたいなら速く見るぞい

では

ラセ&p・リオ

「「どうぞ!!」「」

良くぞ言った!!

第二十八話 力VS力

全く別々の場所に飛ばされた龍人達

龍人、海斗が目覚めた同時刻

更に離れた場所で

「うん……………」

秋葉が目覚めた

「此処は……………何処よ？」

回りを見渡す

「此処つて……………砂漠！？」

見渡す限り一面の砂、砂、砂

「しかも誰も居ないじゃない……………」

秋葉は立ち上がって砂を払う

「探すしか無いわね……………」

隣に落ちてた鎚を背負い直して砂漠の中を歩き始める

暫くして

「暑い……………」

太陽の光が容赦なく打ち付け秋葉の体力を蝕んでいく

「なんで砂漠なのよ……………」

文句を言いつつさらに歩き続ける

更に数時間後

「もう……………限界……………」

もはや気力で歩いていた秋葉
身体は限界に達していた

「うう……………」

倒れこむ秋葉
もう歩く体力も残っていない

「私…………死んじゃうのかな……………」

声も枯れている

最早絶望的状况だ

その時、

「……………」

秋葉の眼にはあるものが映った

「あれは……………」

奇跡だった

「オアシス……………！！」

秋葉は立ち上がりオアシスへ駆け出した

もう体力も残っていない筈

だが秋葉は走っている

水という最高の物を求めて

「……………美味しい!!」

秋葉は水を飲んでそう述べた

どんどん水を飲んで行く

その勢いは全部飲み干してしまいそうなくらいだった

「美味しかった……………」

五分ぐらいずっと飲んでいた秋葉

水分補給を済ませた秋葉は龍人達を再び探し始めようとした

その時、

「な、何よ!?!」

大地が揺れる

すると地面から

「ガアアアアアアアアッ!……………」

立派な二つの角をと巨大な尻尾、如何にも堅牢そうな身体を持つ龍、
角龍ディアブロスが現れた

「!?!?!」

秋葉はびっくりして動けずにいた

するとディアブ羅斯は秋葉の方を向き

「俺と勝負しやがれ！！！！」

勝負しろと言ってきた

いや、それよりも――

「じゃ、喋った？」

ディアブ羅斯が喋った

そっちの方が問題だった

「あ？」

ディアブ羅斯は睨む

「アンタ喋れるの？」

もう一度聞く

「知らねえよ」

明らかに喋っている

「会話が成立しちゃってるわね……………（汗）」

「あゝ？………確かに」

ディアブロスもようやく理解したらしい………が

「んな事はどうでもいい！！俺と勝負しやがれ！！！」

「（汗）」

やはりこうなるのだった

「………しょうがないわね、いいわ、受けてあげる」

「っしやあああああ！！！！！！」

翼を広げている

それほど嬉しかったのだろう

「行くわよ！！」

「行くぜ！！」

こうして秋葉とディアブロスの勝負が始まった

「直接勝負だ！！おらあ！！」

ディアブロスは猛スピードで秋葉に突っ込む

「いいわ！！乗ってあげる！！」

秋葉も走り出す

「はあああああああ！……！」

「うおおおおおおお！……！」

そして――

ドゴオオオオンとぶつかる音がした

衝撃で砂煙が発生した

煙が晴れると、

「ふんぬ………」

「はあっ………」

なんと秋葉が素手でディアブロスを止めている

「俺の十八番を素手で止める………燃えてきたあ！………！」

ディアブロスは更に足に力を込める

「負けないわよ！………！」

秋葉も全力をだす

すると、

「なにい!?!」

ディアブロスが僅かにだが、押されている

「まだだあああああ!?!?!?!」

ディアブロスは更に踏ん張る

「くっ!?!」

今度は秋葉が押され始めた

「俺の……勝ちだあああ!?!?!?!」

秋葉を吹き飛ばそうとする

だが驚愕の出来事が

「はああああああ!?!?!?!」

なんと、秋葉が吹き飛ばされそうな状況から盛り返したではないか

「な!?!」

驚きを隠せないディアブロス

「吹き飛びなさい！！！」

そう言ってディアブロス突き飛ばし

「はあああああああ！！！！！」

「があっ！！！」

アッパーを決めた

ディアブロスは天高く舞い地面に叩き落ちた

「私の勝ちね」

秋葉はディアブロスにそう告げた

少しして

「んを！？」

ディアブロスは飛び上がるように起きた

「眼が覚めたのね」

秋葉はまだ此処に居たようだ

「……………お前が勝ったんだっけ」

ディアブ羅斯は思い出すようにいう

「そうよ」

嬉しそうな顔で言う

「まさか人にとはな……………」

少し下を向く

だが次にこう言った

「だが俺はまだ“負けた”訳じゃねえ、お前にも、自分にもまだ“負け”ちやいねえ」

何処かで聞いたことがあるようなセリフを言う

「だから俺はお前に着いていく、いいか？」

——んなめちやくちな

秋葉は一瞬そう思ったが、

「いいわよ」

OKした

「ありがとよ、俺はガイ、宜しくな」

「私は秋葉、よろしくね」

砂漠の中で出来た新しき友

それは暑い砂漠での熱い勝負の出来事だった

第二十八話 カVS力（後書き）

何処かで見たことあるという方

お察しの通りだったりするｗｗｗｗｗｗ

ラセ

「どういう事だ？」

リオ

「説明プリーズ」

だが断るｗｗｗｗｗｗ

さあお二人さん、感想は？

ラセ

「素手で止めるとか凄すぎる……………（汗）」

リオ

「俺絶対無理（汗）」

以上お二人の感想ですたゝ

ラセ&mp・リオ

「「待てゝ！！」」

断る！！

第二十九話 この空で（前書き）

さあお察しの通りラセ side です

ただ一人称視点じゃないけど（汗）

気にせずレッツゴー（汗）

第二十九話 この空で

バラバラに飛ばされた龍人達

秋葉が新たな仲間、ガイと共に龍人達を探し始めた頃、

とある場所で

「リオ……………何処に居るんだ……………？」

ラセはリオを探して歩き回っていた

ラセが眼を覚ました時には既にリオと離れ離れとなっていた

木々が立ち並び洞窟が空いていて、崖のある場所だった

ラセは歩くうちにこんな事を思い始めていた

—— リオと初めて出会った場所に似ている

その思いが歩いていくうちにどんどん強くなる

だがやはり違う所もある

「リオ……………」

ラセはひたすら歩く、

暫く歩くと、

「クワア？」

「……………」

大きな耳が特徴の大怪鳥イヤンクック、通称クック先生が水を飲んで居た

のだが、ラセの足音に気付き

「クワアー!!」

急に襲い掛かってきた

「……………」

ラセは無言で自分の得物、双剣を構える

「クワアーーッ!!!!」

火炎を吐き散らしながらラセに突進するイャンクック

だがラセはその場から動こうとしない

直撃する

筈だった

ラセが神速の域で避けるまでは

「クワア？」

当たらなかった事に不思議に思い

後ろを向こうとしたら、

「……………すまない」

ラセがそう呟くと

「クワァ……………」

イャンクツクの首元からいきなり大量の血が吹き出し、倒れる

そしてラセはそのまま再び歩き出す

だが、

「此処にも居ないか……………」

いくら探しても未だに見つからなかった

「リオ……………本当に……………今、何処に……………」

ラセは精神的にも危なかった

リオと出会ったのはラセが生まれて少し経った頃だった

親が殺され唯一生き残ったラセは誰かを探して歩いていた

途中にあった薬草や果物を必死に集めて命を繋いでいた

そんなある日だった

ラセはある龍に襲われた

その龍はラセを不法侵入者とみて排除しにかかったのだ

当然、まだ幼いラセには逃げる事はままならなかった

その龍はブレスを吐いて殺そうとした

ブレスが眼の前に迫った

その時だった

空からブレスが放たれた

ブレスは相殺された

ラセは次の瞬間宙に浮いた

赤い翼を持つ龍に捕まれて――

それがリオとの出会いだった

二人はそれ以来ずっと一緒に、片時も離れずに生きてきた

だから、寂しさに耐えられなくなってきたのだ

「リオ……………」

そんな時だった

「がつ！！！！？？」

ラセがいきなり吹き飛ばされた

「！！！？？」

辺りを見回すが、誰も居ない

だが、

「がはっ……………」

またしても吹き飛ばされた

「一体……何なんだ……？」

再び辺りを見回す

すると一ヶ所だけ回りと違う所があった

それを蹴飛ばすラセ

すると姿がはつきりと現れた

「……………！！」

その姿を見てラセは言葉を失った

紫色をした身体を持ち

異様にでかい尻尾

先が物凄く尖った角

その力により姿を消したり出来る龍

古龍種、霞龍オオナズチだ

オオナズチは再び姿を消す

「くっ……………何処だ!？」

分かる筈も無くまた吹き飛ばされる

「ぐっ……………」

もうラセの身体は限界だった

——最低でも後二撃受ければ死ぬ

残されたチャンスは一回限り

その間に逃げ切れるのか

「くっ……………」

ラセは痛みを堪えながら走り出した

姿が見えないから追ってきているのか分からない

ラセは無我夢中で走る

だが、無情にもそれは無意味に終わる

「嘘だ……………」

眼の前には

崖

もう逃げ場が無い

そしてオオナズチはわざと姿を現す

「こうなったら……………」

ラセは武器を構える

だが、

武器を手取る前に突進を受けてしまった

あまりにも速く反応出来なかった

吹き飛ばされる先は――

崖

かなりの高さだ

ラセは今までの事を思い出す

――走馬灯だ

自然と涙が零れる

まだ死にたくない

リオと、皆とまだ一緒に居たい

その時だった

ラセの落下は止まった

「……………」

涙を拭き確認する

其処には赤い翼を持つ空の王者がラセを力強く掴んでいた

まるで二度と離さないように

「ガオオオオオオオオオオッッッ！！！！！！」

ラセはその相棒の姿を確認して意識を手放した

第二十九話 この空で（後書き）

ちよつと過去を書いてみました

二人の出会った経緯を少しはしよってますが……

まあそろそろ全員揃う……かな？

第三十話 紅き龍（前書き）

サブタイトルに騙されてはいけません

ラセ

「どついう事だ？」

またサブタイトルにいいのが思い付かなくてさあ……………

取りあえず何か書いとかないと……………

勿論いいのが浮かんだらサブタイトル変えますよ

リオ

「ホントに大丈夫かよ（汗）」

分からん

また睡眠狂がぶり返してきたし……………

今は何とかいけるが（汗）

ラセ

「それ全然駄目じゃ……………（汗）」

そう言われましても……………（汗）

リオ

「しっかりしろよな」

サーセン(汗)

第三十話 紅き龍

龍人とレクスが再開してから数時間後

「何処なんだろう……」

「グルア……」

龍人とレクスは生い茂る木々の中を歩いていた

何故歩いているのかというとレクスは飛行は得意では無い為空からの細かい搜索は困難だと判断したからだ

そんなこんなで歩き続けている二人

「やっぱり此処は……」

何か分かったらしい

「レクス、僕達密林に来ちゃったみたいだよ」

龍人の言う通り、此処は密林なのだ

「グル……」

レクスも後ろ足で立ち周囲を見る

——確かに此処は密林

レクスも感じ取った

それから更に道無き道を進む

「そろそろ休まない？」

龍人はレクスに提案する

「グルウ」

レクスは賛成と言わんばかりに首を縦に振る

「疲れた〜（汗）」

「グルア〜（汗）」

龍人とレクスは互いに背中合わせになるような形で腰を下ろした

「皆……………無事かなあ……………」

龍人は皆の事を心配していた

そこに

「グルア」

レクスが言う

「グルウア」

大丈夫、皆無事だよ、と言うように龍人に語りかける

「レクス……………」

龍人はレクスの瞳を見る

「……………」

レクスは無言で頷く

「きっと、皆無事だよね……………」

「グル……………」

この、澄みきった程美しく、広い、蒼い空を見上げながら、無事だ
という事を信じて……………また再開出来る事を願う二人

それから暫くして

「そろそろ行こっか」

「グルア」

今度はレクスの上に乗る先へ進み始めた

理由は段々足場が悪くなってきたからだ

少し進むと

「ギャア」

青い鱗を持つ集団、ランポス達が居た

何かを囲んでいるようだが……

「なんだろう……行ってみようか」

「グルア」

二人はそつと気付かれないようランポスの集団に近付いた

集団の中心には、

「……………」

誰かが倒れていた

気を失っているようだ

「誰だろう……………」

龍人は更に眼を凝らす

すると龍人の表情が変わった

倒れている者に見覚えがあった

「レクス！！ランポス達を追い払うよ！！」

その声には威圧が籠っていた

「グルアッ！！」

レクスもそれを察し猛ダッシュで突っ込む

「はああああ！！！！」

龍人は刀を構え、ランポスを一頭切り裂く

「ギャア！？」

気が付かなかったらしく驚いたような顔で龍人を見る

だが直ぐに表情を変え龍人に飛び掛かる

だが、

「グルア！！」

龍人の後ろからレクスが飛び掛かりランポス達をなぎ払う

「ギャア」

ランポス達は不利だと判断し奥へと逃げて行った

龍人はそれを確認し刀を鞘へしまい倒れている者へ駆け出す

「……………」

紅い身体、紅い翼、真紅の瞳……………

そう、クレナイだ

「クレナイ……………」

「グルア……………」

クレナイの身体のおちこちに少し傷が付いていた

多分先程のランポス達が気を失ってまもない頃に傷付けたのだろう

「クレナイ……………」

龍人の眼から一筋の涙がクレナイに零れ落ちる

「……………」

その時、クレナイの身体がピクツと動いた

「!?!」

そして――

「う……………ん……………」

クレナイが眼を覚ました

「クレナイ!!」

「グルア!!」

「龍人……………さんに……………レクス……………さん?」

クレナイは状況が理解出来ていないようだ

「無事でよかった……………」

「グル……………」

クレナイと再開する事が出来た龍人とレクス

残るメンバーは後、六人

果たして無事に再開する事が出来るのだろうか

そしてこの世界の正体とは

第三十話 紅き龍（後書き）

ラセ

「そこで出てきたな……………」

出しました

リオ

「よかったなあ、再開出来てさ」

それは君等もでしょうが

ラセは気絶してますが

ラセ

「最近気絶オチ多くないか？」

リオ

「そう言えば確かに多いな……………」

異空間に飛ばされる↓気絶オチ

…………… 本当だ

ラセ

「まさか気付いて無かった……………？」

そのまさかでございます（汗）

リオ

「無意識すか（汗）」

うい（汗）

ラセ

「笑っていいよな、リオ？（汗）」

リオ

「笑うしか出来ないって（汗）しかも苦笑いの方な（汗）」

第三十一話 影の仕業（前書き）

今回はギャグ路線……………のつもり（汗）

ラセ

「つもりって（汗）」

皆さんのツボにはまるかどうか……………（汗）

リオ

「おいおい（汗）」

笑いのポイントは人それぞれだからさあ……………（汗）

ラセ

「確かにな（汗）」

リオ

「ま、まあ楽しめるんじゃないか？（汗）」

まあ……………（汗）

分かんない！（汗）

ラセ

「それはどうしようもないな（汗）」

リオ

「まあ……………楽しんであげてくれ（汗）」

第三十一話 影の仕業

龍人とレクスがクレナイと再開した頃

「……………んお？」

海斗が再び目覚める

「ガルア」

隣にはシャドウが居た

顔を覗きこんでいたら海斗が眼を覚ましたので少々驚いていたいたが

「ガル！！」

直ぐ様海斗に飛び付いた

「痛え！！シャドウ痛え！！」

最早悲鳴に近い今の声

その声である事を思い出したシャドウは直ぐ様に離れ

「ガル……………」

反省するようにしゃがみこんだ

「痛え……………なんでこんなに痛えんだ……………?」

どうやら自分の骨が何本か逝った事を忘れているようだ
そしてそれに気付きもしない

「ガルウ……………」

物凄い心配らしく海斗をずっと見ているシャドウ

「大丈夫だ……………と言えは嘘だしな……………正直に言っわ、なんでこんなに痛えのか分かんねえがマジでヤベえ……………」

「ガルウア……………」

もうシャドウの表情はかなりヤバイ

半分泣いている状態だ

物凄い瞳が潤んでいる

そして海斗はそれどころでは無いのにその表情を可愛いと思ってしまった

（ちょっと……………卑怯だな……………これ／＼／）

少し顔が赤くなる

「……………ガルア」

その頃シャドウは何かを決意したように海斗を背に乗せる

「お、おい？」

海斗も何をしたのかさっぱり分らない

「ガルウゝ……………」

なにやら鳶を取り出し海斗と自分の身体を離れないように縛っている

「……………」

一体何がしたいのだろう

少しして鳶を結び終えたシャドウは

「ガルア？」

何かを海斗に聞いている

「どうしたシャドウ？」

不意に話し掛けられたので聞いていなかった海斗

「ガルア……………」

やはり心配な物は心配らしい

何度も聞いている

「ああ……………今はまだな」

その言葉で少し安心したらしい

表情が和らぐ

「んで、どうするきだ？」

今度は海斗が聞く

するとシャドウは、

「ガルアウ……………」

何かを海斗に伝えてから、

物凄いスピードで走り出した

「\$#%@* ¥ ; , ^ ^ ! ! ! ? . ?」

声にならない悲鳴を上げる海斗

だがシャドウは走りに集中しているのでその声には気付かない

いや、わざと気付かないようにしているように見える

何故なら額に冷や汗が出ているからだ

「ガルア……………」

ゴメン、と呟き更にスピードを上げるシャドウ

「あだだだだだだだだだ！！！！」

木の枝が激しく海斗の顔に何度もぶつかる

我慢だ、海斗

暫く走り続ける事数時間

「ガルア！」

木々の中を抜け暖かい場所に出た

目線の先には巨大な湖があった

「……………」

海斗はシャドウが自分を何処に連れて来たのか分からない

「ガル……………」

シャドウは辺りをキョロキョロ見回す

「……………」

何かの物音を聞き付けたシャドウはまた走り出す

「またかよー！！」

この後直ぐにまた木の枝に何度もぶつかったのは言うまでもない

更に走り続ける事数十分

海斗は思う

よく此処まで走り続けれるな、と

シャドウはまだ息すら上がっていない

流石は迅龍ナルガクルガだ

と思っていると

「ガルアゝ!!!」

何かを見つけたのかそれに飛び付く

その視線の先には、

「!？」

一人の人間と二頭の龍

そう、龍人とレクスとクレナイだ

「ガルアゝ!!!」

凄まじい勢いで龍人に飛び付く

「もしかして……………シャドウ？」

その言葉に物凄い勢いで首を縦に振るシャドウ

「グルア……………？（汗）」

突然の事にレクスは理解しきれていない

「は、速い……………（汗）」

クレナイもその速さに驚く

「という」とは……………背中に乗せてるのって……………海斗?」

「ガルア」

頷くシャドウ

だが、

「海斗……………（汗）」

「……………」

海斗は違う意味で死んでいた

明後日の方向に

白眼を向いていた

「……………（汗）」

シャドウもしまった、と言つような顔をしている

「……………一体何があったのさ（汗）」

「ガルウウ……………」

その後龍人に泣き付いたシャドウ

暫くして起きた海斗に何をされたのかは永遠に秘密

第三十一話 影の仕業（後書き）

リオ

「ちょｗｗｗｗ」

ラセ

「海斗………御愁傷様だ（汗）」

シャドウが頑張りすぎて海斗が酷い目に逢っちゃいましたｗｗｗｗ

リオ

「海斗の扱い酷えｗｗｗｗ」

ラセ

「………僕は何も言えないな（汗）」

海斗は半分被害キャラだからねえｗｗｗｗ

リオ

「被害キャラってなんだよｗｗ」

今作りますた！！ｗｗ

ラセ

「駄目だろ（汗）」

第三十二話 悲劇（前書き）

ラセ

「な、なんだこのサブタイトル（汗）」

んーと……

まあ結果だなww

リオ

「意味分からん（汗）」

まあ読めば分かるさ
読めば

ラセ&mp・リオ

「「???」」

ではではどござ〜

第三十二話 悲劇

シャドウの活躍？で龍人と再開出来た海斗

海斗本人は微塵も思っただけ

その頃、

「此処は何処なのよー！！！！！！」

秋葉が叫んだ

その声に驚いたのか木の枝に止まっていた鳥達が次々と飛んでいく

「此処は………ただの荒地だな………」

対照的に冷静なガイ

「あ………荒地？」

「それしか考えられねえ」

地面が凸凹している上に固い
その上見渡す限り地面しか無い

故に草木も見当たらない

「何時まで続くのよ、この荒れ地」

「……………分かんねえ」

頭をかきながら答えるガイ

「ハア……………（汗）」

そう溜め息を吐く秋葉だが本人はガイの上に乗って歩いていない

ガイは「此も強くなるための修行だ！！！」と言ってずっと乗せて
いる

効果は無いと思うのだが（汗）

それから更に数時間

「お腹空いてきたわね……………」

と秋葉が呟く

それを聞いたガイは、

「サボテン食うか？」

何処からか取り出したサボテンを秋葉に見せる

「私食べられないわよー!!」

勿論速攻で拒否した秋葉

「美味いんだがなあ……………」

サボテンを食いながら呟くガイ

ホントに何処に持っていたんだ

疑問はやまない……………」

更に数時間

「お？ 荒れ地を抜けたみたいだぜ？」

「ホント!？」

秋葉が飛び上がるように起きる

「此处は……………沼地だな」

「沼地……………」

秋葉はちよつと嫌な顔をしたが

「荒地よりはましよね……………」

無理矢理納得させた

「あれは？」

少し歩いた所で秋葉がある物に指差す

「あれは……………厳選茸か？」

ちよつと一風変わった茸が生えていた

「厳選茸？」

「多分な、食うと美味いんだとよ」

「食べられるのねアレ……………（汗）」

と言いつつも厳選茸を採取していく

結構集まった所で、

「集めたはいいけど……………どうしようかしら……………」

どうしようか悩んでいた

「焼けば？」

ガイが提案する

「火はどうするのよ？」

「……………根性だ」

「却下ね」

「即答!？」

その反応に秋葉は笑う

「にしてもよお……………ホントにどうすんだよ？」

と悩んでいると

「——火なら我が起こしてしんぜよう」

空から声がした

「誰!？」

秋葉が見渡す

「どっかで聞いた声だな……………」

ガイは心あたりがあるらしい

そして空から現れたのは――

「あつ！！テメエ！！」

その姿を見て真っ先に声をあげたのはガイ

「貴様は……………あの時のディアブロスか」

「え？知り合い？」

どうやら面識があるようだ

「俺のライバルの古龍、炎王龍テオ・テスカトルの業焰だ」

「貴様は人間のようだ……………まあいい」

詳しくはモンスター達の心情を参照

「で、何で此処にいたんだよ？」

ガイが聞く

「嗚呼…………… ちょっと暇潰しに立ち寄ったら貴様達が居てな……………」
「そう言う貴様は何故此処に？」

逆に聞かれたガイは

「俺はもつと強くなる為に強い奴を探して旅をしてんだ。コイツと一緒に。コイツといれば強い奴に会える、そんな気がすんだよ」

何故か誇らしげに言う

秋葉は話についていけないようにポカンとしている

「そうか……………」

それを聞いてフツと笑う

「そう言えば火を欲しがっていたな」

「ああ」

「我が炎を貸してやろう」

なんと業焰が火をつけてくれるのだという

「ホント！？」

秋葉の眼が輝いている

「我は嘘など付きはしない」

「ありがとう!!」

そう言つて業焰に抱き着く秋葉

よっぽど嬉しいのだろう

「ではいくぞ……」

そう言つて深く息を吸い込み

「はぁっ!!」

火炎放射

「ば、バカヤロウ!!」

ガイが叫ぶ

だが時既に遅し

茸は灰になった

それどころか……

「あ……」

炎が木々に燃え移った

「逃げろおおおおお!!!」

急いで沼地から抜け出した秋葉達

その後炎はどんどん燃え移り沼地は大火事になったのは言うまでもない

第三十二話 悲劇（後書き）

リオ

「おいwww」

ラセ

「大火事って……（汗）」

こんななっちゃいましたwww

リオ

「こんなwww」

ラセ

「どれだけ火力強いんだ（汗）」

さあ？www

第三十三話 復活（前書き）

おおしっくりこないwww

ラセ

「笑える問題なのか？（汗）」

リオ

「笑う所じゃねえな（汗）」

ちえすとおおおおおおおおおお！！！！！！！！！www

ラセ

「いつの間に簀巻きに（汗）」

リオ

「速えな（汗）」

ん？

最初から簀巻きだったか？www

ラセ

「気付かなかった……………」

リオ

「違和感無し（汗）」

hahaha

第三十三話 復活

秋葉とガイが業焰と出会い沼地で大火事を起こした頃、

「ガオ……………」

リオは必死に看病していた

ラセの骨は何本か逝っていた

肺などに刺さっていないのが奇跡だった

「ガオア……………」

リオは薬草などをひたすら集めに集めた

だがラセは気を失っている為にアオキノコと混ぜた回復薬を飲ませる事が出来ずにいた

ラセの身体の外傷は殆ど無い

ダメージは殆ど骨だけに与えられていた

普通ではあり得なかった

だが今現実を起こっている

「ガオ…………ガオ…………」

只その場をつろつろする事しか出来なかった

場所は変わらず森丘

只ラセがこうなってしまった元凶のオオナズチに再び遭遇しないようにかなり奥で隠れている

——俺が、もう少しでも速くラセを見つけていれば…………

ラセがこんなボロボロになるまで見つける事が出来なかった罪悪感
己の未熟さ

何時目覚めるか分からない不安
後悔の念

様々な感情がリオを襲っている

ラセは大切な親友であり、家族であり、相棒である

だからこそより一層リオを襲う感情が強くなっていく

そんな時だった

「ん……………」

ラセが目を覚ました!!

「ガオツ!?!」

直ぐ様ラセに駆け寄る

「リオ……………」

「ガオツ!?!」

リオはラセに飛び付く

「リオ……………」

リオの瞳からは一筋の涙が流れていた

「ガオア……………」

リオは自分の想いを全て話した

守れなかった事

速く見つけられなかった事

全てを話した

「……………」

ラセは黙って聞いていた

そしてこう言った

「……………」リオ、僕は気にしてないよ。それにこうしてまた会えた、それだけでいいじゃないか。そうだろう？」

「ガオ……………」

「だから、もう過ぎた事は忘れよう。此から二度と離れ離れにならないようにすればいいんだよ……………」

その一言一言はリオの様々な感情を吹き飛ばしていた
そしてリオは改めて誓った

二度と離れ離れにならず、ラセを守り抜いていこうと

「ガオ……………」

「リオ……………」

——もう二度と離さない

互いにそう心に再び決めた

それから数時間

「そろそろ行こう、リオ」

「ガオッ」

ラセの身体はもう殆ど万全の状態に近い程になっていた

ラセはリオの背中に乗る

「ガアアアアッ！！！」

リオは飛び立つ

ラセも力強くリオの背中を掴む

その後、赤い翼を持った龍とその上に乗った少年が飛び立ったという情報がその辺りを飛び回ったが定かでは無いので直ぐに沈下した

第三十三話 復活（後書き）

ちえすとおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!

ラセ

「まだやってる（汗）」

リオ

「一体何がしたいんだ？（汗）」

創価

君達は知らないんだっとな

ラセ&リオ

「「？」」

此は寒さ対策さwww

常に身体を動かす事で体温をハイに保つのさwww

ラセ

「だからって何故簀巻き（汗）」

教えて貰ったからだ!!

勿論ホッパ。ロヤキ。バ。貼るも常備!!!!!!!!!!

リオ

「寒がりなのか？（汗）」

違う

今年は低体温に変化しないっぽいんだ

ラセ

「変温動物か（汗）」

イエスｗｗｗｗ

リオ

「ホントに人間か？（汗）」

ノーｗｗｗｗ

ラセ&リオ

「じゃあ何なんだ（汗）」

人外さｗｗｗｗ

第三十四話 異臭騒ぎ（前書き）

まあ誰が出るかはまるわかり

ラセ

「いいの？（汗）」

い
い
の
さ
w

とゆー訳で……

ちえすとおおおお おおおお おおおお ! ! ! ! !

リオ

「何故そうなる W W W」

第三十四話 異臭騒ぎ

ラセとリオが森丘を飛び立った頃、

こういうフレーズが多いと思うのは無視の方向で

——密林——

「何か臭くねえか？」

「……………確かに臭うね（汗）」

密林では異臭騒ぎが起こっていた

「グルウ……………（汗）」

「ガルウ……………（汗）」

「何ですかこの臭い（汗）」

皆鼻をつまんでいた

「異常だろ……………」

「とりあえず臭いの原因を探らなきゃ……………」

とりあえず臭いの原因を搜索する事にした

「ここら辺から臭うね……………」

「ああ、元凶の場所と見て間違いねえな」

今龍人達は何故が落ちていたガスマスクを偶然に拾って装着している

「しかし一体なんなんでしょうね……………」

「グルウア」

「ガル」

本格的な搜索開始——

と思いきや

「「臭っ!!」」

即刻見つかったようだ

そしてその臭さでガスマスクが――

「「嘘!?!」」

壊れた

「どんだけ臭いんだよ!!!!」

「臭いにも程があるって!!」

突っ込んでモツツコミきれない程だ

「グルア!!」

「ガルア!!」

レクスとシャドウが何かを見つけたようだ

「あれは………なんですかね?」

その視線の先に居たのは――

「ババコンガだな………」

ピントの毛並みに器用に茸を持っている尻尾
そして特徴的な頭の毛

それがババコンガだ

「ゴフツ」

だがこのババコンガはドジらしい

「ありゃあ……………」

「噎せてるね（汗）」

そう、噎せていた

「ゴフツ」

噎せている為に臭いが頻繁に入れ替わり、この異臭が発生したのだ

「ゴフゴフツ!!」

龍人達に助けってくれと求めている

「とにかく助けなきゃ」

普通なら我慢出来ない臭いを我慢して助けに向かった

「此は重症だな……………」

「うゝん……………」

海斗はそう判断した

だが鼻をつまんでいる為に緊張感が感じられない

「もうショック療法だね」

ショック療法……

一体何をするのだろう

「どうするきだ？」

「まあ任せてよ」

少々自信ありげに話す

「ゴフツ？」

「ちょっと我慢してね……」

そう言うと太刀の鞘を持って

「えいつ！！」

「！？」

ババコンガの首の後ろを鞘で殴った

鈍い音と共にババコンガが何かを吐き出した

「やった！！」

吐き出された物は――

「こりゃあ只のゴミだな……………」

ゴミだった

「大方食つてた茸に張り付いてたんだろっよ」

「いや気付くでしょ（汗）」

と因果を考えていると

「ウホー！！ウホッ！！」

大喜びでお礼を言うババコンガ

「いいってお礼なんか」

と少し照れる龍人

「……………ウホッ！！」

何かを思い付いたババコンガ

「ウホウホッ！！」

着いてきてくれといわんばかりに歩き出す

「行ってみるか」

龍人達はババコンガの後に着いていった

少し歩くと

「うわぁ……………」

そこはまるで楽園のような場所だった

沢山の昆虫達が飛び回りモスやコンガが平和に暮らしている

「ウホッ!！」

ババコンガが指差す

その先には

「でけえ……………」

大きな剣、大剣が大地に猛々しく刺さっていた

「ウホ」

ババコンガはこの大剣をくれるらしい

「いいの?ありがとう、でも僕此持つてるからなぁ……………」

そう言つと海斗が

「じゃあ俺が貰つてやるよ」

と言つた

「いいよね？」

「ウホッ」

ババコンガはゆつくりと頷く

「んじゃ頂くぜ……………」

海斗は力いっぱい引き抜いた、があまりにもさらつと抜けた為、後ろに転けてしまった

「痛え……………」

そんなこんなで大剣を手にした海斗

何時全員再会出来るのだろうか

第三十四話 異臭騒ぎ（後書き）

ちえすとおおおお おおおお おおおお !!!!!!!!!

ラセ

「何なんだあの太剣」

後日発表されます
WWW

ラセ

「何時だよw」

次の話の中で

ラセ

「(汗)」

ちえすとおおおおおお！！！！！！

リオ

「だから何でw」

第三十五話　そして……………（前書き）

モンスター達の心情の更新予定だったけどまだ細かい部分が執筆出来て無い……………

ラセ

「だったら書けばいいのに……………」

三時間以上も粘ったさー！

疲れたから此方を更新する事にしたんだー！

リオ

「意味が分かんねえな（汗）」

そして今から寝るー！！

ラセ

「寝るな（汗）」

リオ

「おいw」

ちえすとおおおおおおおおおおー！！！！！！

ラセ

「もう……………駄目だな（汗）」

リオ

「元からじゃなかったっけwww」

第三十五話　そして……

異臭騒ぎを解決した龍人達

「……………しっかしなんなんだこれは」

ババコンガから貰った？大剣を眺めながら言う海斗

その大剣は刀身の半分近くが緑色に染まってそこから更に朱又は茶色に近い色に変わっており更に黄色より薄い色の三色が着いていた

「……………同じ力を感じる……………」

クレナイがそう呟いた

だがそれは誰にも聞こえなかった――

海斗の持つ大剣は、

封龍剣「真滅一門」

という伝説の武器の一つとして伝えられている

だがそれを龍人達はまだ知るよしも無い……………

密林を抜けて数時間後

「何処だ此処……………」

道に迷っていた

「迷っちゃったね……………」（汗）

見渡す限りの木々、

「……………何か見覚えが（汗）」

「ガルア……………」（汗）

海斗とシャドウは見覚えがあるという、

それもその筈、何故なら此処は……………」

樹海なのだから

「なあシャドウ……………俺達……………戻ってきたただけだよなあ……………」（汗）」

「ガルウア……………（汗）」

ただただ苦笑いをするしか出来ない

「あらら（汗）」

「グルア……………（汗）」

そしてそんな二人に何も言えない龍人とレクスだった

「ま、まあとにかくだな（汗）」

気を取り直して言う

「ここからどうするかだ」

「うーん……………」

一番重要な問題だ

「向こうも探して動き回っている、だからお前達としか出会えなかった、そうだろうか？」

「確かに……………」

海斗の言う通りだ
だからそれに龍人は頷く

「だから俺達は暫く此处で待つことにしようと思っている、いいか？」

龍人に聞く

「いいと思うよ、いいよね？」

その龍人が更に聞く

「僕はいいですよ」

「グルウア」

「だって、僕もいいよ」

満場一致で決定した模様

「皆すまねえな……ま、休憩しようぜ？」

「賛成」

と休憩を始めた瞬間、

「ホントに信じられないわよ……!!」

声がした

「この声……秋葉か!？」

声の聞こえた方を向くと

「テメエもうちつと加減しろよな………（汗）」

「本当にすまない………（汗）」

その後に龍人と海斗には聞き慣れない二つの声が聞こえてきた

「誰かと一緒にいたいだね………」

「だな………」

まだ声だけしか聞こえてないようだ

少しすると――

「全くホントに………!？」

秋葉の姿が見えた

「タツッ!!海斗ッ!!」

龍人と海斗を見つけた秋葉が手を振りながら駆けだした

「よう、無事だったんだな」

「お陰様でね」

あんまり喜んでいないように見えるが本当は物凄く喜んでいる

「後ろに居るのは一体………？」

気になるので聞く

「あ、この二人は——」

「ガオオオオオオオオツツ！！！」

秋葉の言葉を遮るように何かの咆哮が響いた

「何だ一体！？」

すると

空から何かが降り立って来た

「あ！！二人共！！無事だったんだ！！」

そう、空から現れたのは

「何とかな」

「ガオツ！！」

ラセトリオだ

「此で全員集合だな」

こうして全員再会する事が出来た皆

だが此からどうするのだろうか………

第三十五話　そして……………（後書き）

リオ

「おい！！ラセッ！！」

ラセ

「どうしたのリオ？」

リオ

「なんかこんな紙切れが……………」

ラセ

「……………ぶっ」

リオ

「?!」

ラセ

「な、なんだ此……………」

リオ

「なんかくれた」

ラセ

「誰に？」

リオ

「此方の作者」

ラセ

「正直に言ってもいいよな？」

リオ

「いいと俺は思っぜw」

ラセ

「絵下手すぎるよ………w w w」

本当に絵は下手ですw w w w w

お前に美学センスは皆無と言われる程なりw w w w w

第三十六話 マダオにはなりたくない(前書き)

はいサブタイトル関係無いよwww

海斗

「なんだそれ(汗)」

ラセ

「駄目だろう……(汗)」

リオ

「こんなでいいのかw」

ははっはっ はは

(ー)mgっ

リオ

「だから何がしたいんだwww」

さあなwww

第三十六話 マダオにはなりたくない

何とか全員再会する事が出来た龍人達

「全員集まった事で改めて聞くけど……アキ、その後ろの二人は誰？」

龍人達はガイと業焰の事は全く知らないので聞いた

「俺はガイ！！見ての通りディアブロスだ！！宜しくな！！」

無駄にテンションの高いガイ

「我が名は業焰、炎王龍テオ・テスカトルだ」

と自己紹介をした二人

「僕は龍人、こっちは家族のレクスとクレナイ」

「グルア」

「初めまして」

深々と礼をする三人

「俺は海斗、此方は親友のシャドウだ」

「ガルア！」

手を上げて挨拶を交わす二人

「……………僕はラセ、コイツは相棒のリオ」

「ガオツ!!」

こうして全員自己紹介が終わった所で

「では我はそろそろ……………」

そう言つて業焰は何処かへ飛び立とうとした

「何処へ行くんだ？」

海斗が聞く

「実は大切な用がな……………」

「そうか」

そうして急ぐように飛び立って行った

何処へ向かったかはモンスター達の心情を参照

「んで……………まあ……………此からどうするか、だ」

全員集合したとはいえ海斗の言う通りどうすればいいのか悩んでいた

「どうしようか……………（汗）」

「……………分からないな（汗）」

行き詰まっていた

「……………」

暫くの沈黙

「グルアウ……………」

「ガルア……………」

「う……………」

「が……………」

レクス達も悩んで……………いる？

「なんでアンタは寝てんのよ（汗）」

そう言いながら秋葉はガイの頭に天誅を喰らわす

「んが?!」

完全に寝ていたようでへんな声が出たガイ

「ついつい寝ちまったぜ……………（眠）」

欠伸をしながら言う

「真面目な話なんだが……………（汗）」

「ガルア（汗）」

呆れる海斗とシャドウ

「いいじゃねえかよ、んな細けえ事よお」

「よくないから（汗）それに細かく無いし（汗）」

すかさず突っ込む龍人

「……………（汗）」

そしてレクスとクレナイとラセとリオの四人はこのテンションに着いていけないのだった

大丈夫なのか本当に不安になる

と言うより不安要素しか無いと思われる……………（汗）

ガイのおふざけのせいで大分時間をくってしまった龍人達は結局村等を探す事に決定した…………

…………のだが

「真っ暗だね（汗）」

既に日が落ちてしまっていた

「…………しょうがないから今日は此処で野宿だな」

「私野宿なんて嫌よ」

野宿に反対する秋葉

「…………夜になれば一体どんな奴が居るかも分からない上に見通しも悪い、だからここは野宿で我慢するしかない」

ラセが秋葉を説得する

「誰か来たなら俺が相手になってや」「お前は黙ってる」…………（汗）」

ガイの言葉を無理矢理遮り威圧を籠めて言う海斗

ガイはそれを察し黙りこんだ

「……………分かったわよ」

秋葉は渋々了承した

（凄いなラセは……………あのアキを説得しちゃったよ……………（汗））

だがラセの内心は

（……………言ってしまった（汗））

かなり焦っていた

秋葉の何時かの反撃が怖い（汗）

「ガオア（汗）」

リオも物凄く心配している

「……………（汗）」

暗闇と言う事もあるがラセとリオの額に大量の冷や汗が溜まっている事に誰も気付きはしなかった

第三十六話 マダオにはなりたくない（後書き）

ちえすとおおおお おおおお おおおお !!!!!!!!!

リオ

「微妙だな（汗）終わりが（汗）」

だって次話はリオ視点……の予定だからさw

ラセ

「速くない？」

我慢出来なくなつたのさw

リオ

「俺としては嬉しいが……嫌な汗が……（汗）」

ラセ

「リオ……、多分以上で当たってると思う……（汗）」

ちえすとおおおお おおおお おおおお ! ! ! ! !

第三十七話 この夜空の下で——（前書き）

今回は——

祝ユニークアクセス数4000人越えも兼ねて……

リオ視点です！！

リオ

「本気で嫌な予感しか………」（汗）「

ラセ

「それよりさっきまで寝てた筈………」（汗）「

起きましたwww

んまあどうぞwwww

第三十七話 この夜空の下で――

樹海で野宿する事になった龍人達

皆疲れきっていたので直ぐ様眠りに着いた――

「…………ガオ（汗）」

駄目だ（汗）

眠れねえ（汗）

何でだ…………（汗）

えゝと、今日は何したっけ…………

まずラセを探して飛び回って…………、誰も居なかったのにボロボロになって吹っ飛ばされてた所を俺自身でも信じられねえスピードで追いかけてキャッチ…………

それから必死に薬草とかを探し回って……

大丈夫になった所でラセを気遣いながらコイツ等探し回って見つ
て……

「ガオツ（汗）」

めちゃくちゃ動いたよなあ今日（汗）

なのに何でだ？

眠れねえよ（汗）

「ガオア……………」

散歩でもするか…………

パトロールも兼ねて…………

く樹海の中く

「ガオツ（怖）」

怖っ（汗）

夜になるとこんな怖えなんて知らなかったぞ（汗）

俺ホントは暗いのか怖いのかダメなんだよなあ……………（汗）

しかも雰囲気出すぎだろこれ（汗）

何アレなんて

挟れたように空いてる穴から如何にも出そうな感じ（汗）

「ガオオオ……………（汗）」

しかもミスった事に帰り道分なくなっちゃったぜ……………（汗）

「……………」

ん？

なんだ今の？

「……………」

「ガオ……………」

此方から声がする……………

何がいんだよ……………（汗）

「……………ギヤツギヤツ……………」

「ガアアアアアアアッ！……！（泣）」

喋った……………？（泣）

「オマエ、誰ダ？コタエロ」

「ガ、ガオ……………」

お、俺はリオ……………

「オレチャマハチャチャブー、奇面族ダ」

チャチャブー……………

聞いた事があるぞ……………

確か絶滅寸前の小さくも誇り高き戦闘種族だったよな……………

「ガオオオツ？」

どうしてこんな所に？

俺は聞いてみた

「オレチャマハ旅が好きデヨク旅一出ルンダ。ソシテソノ旅カラ今
帰ッテ来タ所ダ」

旅好き……………

そりゃまた変わってるなあ……………

「オイ、オレチャマト遊ベ」

「ガオオオ（汗）」

何でいきなりそうなるの（汗）

「オレチャマと遊バナイ……………ダト……………？」

そんな事一言も言っ
てねえからな（汗）

てか何その手に持っ
てんの（汗）

毒毒しいんだけどさあ……………（汗）

それしまっ
t……………

「ヨシヨシ……………殺ス」

何でだあああああああ……！！！！

何でそうなるのおおおお……！！！！？

あ、発音に気を付けろよ此は

「死ネ」

んな場合じゃなかつた……！！（汗）

「ガオア……！！（汗）」

危ねえ（汗）

「飛ンデ逃ゲルトハ…………ナラバ!!」

何をするきだ？

「キエ〜イ♪」

「ガアアアアアツツ??!!」

何iiiiiii??!!

ただジャンプしただけで俺の頭上に…………

「死・ネ♪」

嫌だあああああ!!!!!! (泣)

俺は急いで後ろに下がる

「チツ、避ケタカ」

明らかに本気で殺しに掛かって来てるよおおお!!!! (泣)

もう駄目だ (泣)

こんな怖い所から逃げよう俺 (泣)

俺は物凄い速度で翼を羽ばたかせ空へ逃げる

「待テ!!」

待ちたくねえよ!!! (泣)

「ガアアアアアツッ!!! (泣)」

俺は今、久しぶりに泣きながら飛んだ……

でも……

「ガオ………」

今何処飛んでんだ俺は……

「ガアアアアアツッ!!! (泣)」

泣きながら咆哮を上げて飛び回る……俺 (泣)

何処だよおおおおお!!! (泣)

暫くして……

「ガオ……… (汗)」

やっと見つけた……………（汗）

「……………ガルアッ！！」

へ……………？

「ガルアアアッ！！」

「ガアアアアアアッ！！！！（泣）」

ギアアアアアアアア！！！！（泣）

怖えよお……………（泣）

シャドウの奴……………俺を敵だと勘違いして尻尾で叩き潰そうとして
きやがった……………（泣）

チャチャブーより怖えよシャドウ……………（泣）

――
朝

「おはよう……………リオ……………」

ラセが目覚めると其処には……………

「ガオ……………（泣）」

「ガルア……………（汗）」

蹲って泣いているリオに向かって必死に弁解しているシャドウの姿があつた

「……………（汗）何があつた？（汗）」

因みに後から聞いた話だがリオは一晩中泣き続けシャドウは一晩中謝り続けたのだと

第三十七話 この夜空の下で——（後書き）

リオ

「本気で怖かった……………（泣）」

ラセ

「よしよし……………」

樹海での夜空の下での悲劇でしたwww

リオ

「目の前に……………尻尾が……………（泣）」

ラセ

「そうとうトラウマになっちゃったよ此（汗）」

物凄い今更ながらキャラ紹介（前書き）

まじで物凄い今更です（汗）

最近キャラ紹介というよりキャラの設定を纏めるのにはまっぴり合ったっばいです（汗）

ラセ

「……………何やってんだ（汗）」

リオ

「しかも丁度一ヶ月じゃね？今回までの空いた期間」

……………（汗）

どぞ！（汗）

ラセ&mp・リオ

「スルー?!（汗）」

物凄い今更ながらキャラ紹介

物凄い今更ながらキャラ紹介を

龍人

人間

15歳

武器 天上天下天地無双刀

小さい頃に雪山で一人遭難。息絶える寸前でレクスに助けられた。その為レクスには恩以上の物を感じており、絆も深く、硬く、強い。親友以上の関係。そして大好き。剣術は有り得ない程強く、鋭い。最早我流の領域。両親共に病気で他界。其れ以来海斗と秋葉にばれるまではレクスと少し甘い生活を送っていた。その為一人が大嫌い。

レクス

ティガレックス

?歳(多分15歳)

小さい頃に龍人の命を救った。以来一緒に暮らしている。轟龍と呼ばれる凶暴きまわりない龍……とは思えない程優しい性格。龍人の事が大好きで所構わず抱き着く。何かにつけて抱き着く。少々怖がりだったりする。何故か普通のティガレックスよりも強い。結構賢い。

クレナイ

ミラバルカン

生後一週間前後

龍人とレクスが早朝の散歩の帰り道に路上裏で見つけた卵から帰った。まだまだ子供なのに賢い。常に丁寧語で話す。生まれて一日で人語を話し始めた。主にプレスで援護をする。最近メテオ（隕石群）が使えるようになった。滅多に怒らない。お気に入り場所は龍人又はレクスの頭の上。超真面目な性格。

海斗

人間

15歳

武器 封龍剣【真滅一門】

龍人の幼馴染み。そして親友。ちょっと不幸な体質。其なりに冷静な性格をしている。戦いの時は罨等に掛けたりするのが得意な軍師。幼稚園の頃に家族でキャンプに行った時にシャドウと出会った。そして何故か龍人の家の中に迷い込んでいた所で再会。以後共に行動している。

シャドウ

ナルガクルガ

?歳（多分17歳）

海斗にベッタリの超を超える甘えん坊。その域はレクスをも超える程。昔に海斗に出会い傷を手当してもらってから一目惚れ状態。注意としてオスである。多彩な戦術でサポートしたり特攻したり出来る万能な奴。何故龍人の家に迷い込んで居たのかは謎。

秋葉

人間

15歳

武器　　???

幼馴染みであり龍人の彼女。彼女という設定は忘れているだろう。何故なら作者自身も忘れていたからだ。レクスとは龍人を巡って何度も戦っている、が全てレクスの勝利に終わっている。実は極道の一人娘である。その為かバトルの強さは半端では無く、お玉で戦える程。見た目に反して怪力無双。ガイの突進を素手で止めた上にアッパーで吹っ飛ばすという滅茶苦茶な力を見せた。

ガイ

ディアブロス

20歳

常に戦いを求めてさ迷い歩いているバトル狂。実力は半端無く古龍種と対等に渡り合える程。だが秋葉とのバトルの時、秋葉が勝利を収めた。以来ついていく事に。実は一番頭がいい、のだがバトル狂のせいでフルに生かされてない残念なおバカ。

ラセ

人間

15歳

武器 双刀【白天黒龍】

リオとは生まれた時からずっと一緒に暮らしてきた。だから最早家族同然。だがその絆は家族以上の関係で結ばれている。友が居たが敵組織・零に無惨に殺され、復讐を誓った。そして龍人達と共にやり遂げた。海斗より冷静な性格。最近リオによく甘えられ始めた。秋葉に対して恐怖心を持つており、日に日に増えていつてるのだから。最強にして伝説の双剣使い。

リオ

リオレウス

15歳

ラセとは生まれた時からずっと一緒に暮らしてきた。だから最早家族同然。だがその絆は家族以上の関係で結ばれている。友が居たが敵組織・零に無惨に殺され、復讐を誓った。そして龍人達と共にやり遂げた。若干臆病な性格。奥手なのだがレクスやシャドウに誘発されてか、最近はやたらとラセに甘える姿をよく見かけようになった。ラセと同じく秋葉に対して恐怖心を持つている。ラセと共に伝説として詠われている。

物凄い今更ながらキャラ紹介（後書き）

コラボキャラも若干の変更点があるので載せています

敵さん方は載せてませんがw

龍人

「何其れ（汗）」

まあ……………エエやん（汗）

レクス

「グルアウ（汗）」

まあ……………

キャラが増える度に更新しやす

とりあえず宜しくうううう！！↑五月蠅え

龍人&レクス

「……………（汗）」

第三十八話 嘘お?! (前書き)

今年最後の更新んです

ラセ

「理由は？」

此の小説が俺のモンハン小説の最初の小説だからさ

リオ

「意味が分からん(汗)」

まあ凄まじい事になるw

第三十八話 嘘お?!

(リオにとって) 恐怖の夜が明けた翌日……

「がお……………」

「よしよし……………」

あの時の出来事を鮮明に覚えてしまっているようで思い出しては怖くて泣くの繰り返しを送っていた

その度にラセがリオを宥めているのだが(というより、ラセでないと効果が無い。シャドウの場合は逆効果)、此が中々……………という状態

「大丈夫……………」

因みに今はラセがリオの頭をなでなでしている

此が何時もの状態ならラセもリオも顔が真っ赤になっている事だろう

「ほら、水でも飲んで」

「がお……………」

声に覇気が感じられない

其よりラセはいつたい何処から水を出したのだろうか

何処から今リオに飲ませた水を汲んできたのだろうか

「ねえ……………、ラセ……………」

「ん？」

「その水……………、何処から汲んできたの？（汗）」

どうやら龍人は突っ込まずにいらなかったようだ

「……………彼処だ」

ラセが指差す先には――

「あんなのあつたんだ……………（汗）」

湖があつた

というより気付いて無かつたらしい

何故だ

何故あんな大きなものに気付かなかつたのだ

というツツコミは受け付け無い

理由はずっとレクスに甘えられていたから

「まあ……………、危険はなさそうだし……………」

とりあえず納得させた龍人

「どうだ……………？ 美味しいか……………？」

とラセが聞くと

「ああ……………、美味しいぜラセ……………」

と帰ってきた……………

……………

「……………は？」

「……………へ？」

「……………ほ？」

「グルア……………（汗）」

「ありゃ……………（汗）」

上から、ラセ、龍人、海斗、レクス、クレナイの順番

因みに秋葉はガイの上で熟睡中……………

そのガイも半分寝ながら歩いていた

「……………」

因みにリオは目を真ん丸にして見開いている

「「喋ったあああああああ??!!」」

その辺り一面に凄まじい驚きの声が響き渡った

「……………えええええええ??!!」

喋ったりリオ本人ですら驚いている

「どゆ事お!?(汗)」

海斗が驚きのあまり崩壊しつつある

「もしかしてさっき飲んだ水が……………」

「……………そうとしか思えない」

水に秘密があるようだ

因みにレクス、クレナイ、シャドウは顎が外れた上に硬直してしまっている

「……………只の水だね」

調べてみたが、色も匂いも、普通の水と変わらなかった

「いったいどうしてなんだろう……………」

と悩んでいると

「おい二人共、」

海斗が呼ぶ

「此所に立て看板があるんだが（汗）」

海斗の隣には、海斗が言った通り立て看板があった

「あつたんだ……………（汗）」

「……………（汗）」

何が書かれているのかと言うと、

——奇跡の水——

——この水を飲んだモンスターは人語を話し出す。既に人語を話せるモンスターや人間には効果無し——

「「何其れ……………（汗）」」

龍人とラセは声を合わせて、そう呟いた

「でも美味しい」

だがその隣でリオはひたすらに水を飲んでいたという

第三十八話 嘘お?! (後書き)

リオ

「ちょww俺喋ったよww」

ラセ

「まあ此は此で嬉しいな……………」

半ばヤケクソでやっちまえで書きましたw

リオ

「ん? という事はだな……………」

ラセ

「レクスも喋るのか?」

はいw

遂にしゃべっちゃいますw

リオ

「だがその前に……………、俺をこっという扱いするの止めて(泣)」

大丈夫

新年になったら扱いが一変するから(多分)

ラセ

(怪しい……………)

第三十九話 計画、そして——（前書き）

裏切ってやりましたよwww

今年中にもう一回更新してやったwww

さあ気になるシャドウの一人称判明の時

其ではござ！

第三十九話 計画、そして――

水を飲んで喋り始めたリオ

「ええええええ……………」

こんなの本当にいいの？ 的な叫びなのだろう――

只一人を除いて、

「リオって……………、意外と声綺麗なんだ……………」

「意外とは余計だ（汗）」

そう、ラセである

「いや……………、何時もガオガオしか喋れて無かったから……………」

「ま、まあ……………（汗）」

なんの会話だ（汗）

其所の二人周りがどんな空気になってるの気付け（汗）

まあ二人（一人と一頭）は寝ているのだが

とまあ謎の会話は暫く続いたのは別の話

何故かは分からないがラセとリオの顔が話の途中で紅くなってきたのも別の話

「所でさあ……………」

まだ少し抜けれていない龍人が皆に語りかける

「リオが喋ったらああだったから……………、レクスとシャドウが喋るとどうなるのかなあ……………」

「「！！」」

確かに

リオがああなのだからこの二人（二頭）は喋るといったいどうなるのか

早速実験してみた（トリ。ア風）

—— 龍人、レクスサイド

「レクス」

「グル？」

龍人がレクスを呼ぶ

その手に飲んだら喋り出すあの水を入れた容器を持って……

「この水すっごい美味しいよ！ レクスも飲んでみて！」

「グルウ?!」

ホントに?! という表情で龍人を見るレクス

「うん、レクスも飲んでみなって」

とは言っている龍人だが本当は飲んでいない

故に

（ごめん…………、本当は飲んでないんだ…………）

と、罪悪感に襲われていた

「……………」

レクスは水を少し見ながら、

「……………グルア」

一気に飲んだ

「……………！！！」

この水に何かを感じたようだ（何かってなんなんだ）

「どお？ レクス？」

感想を聞く龍人

帰ってきた返答は――

「うん、すごく美味しい……………、ってあれ？ ボク喋れて……………」
「？」

——海斗、シャドウサイド

「シャドウ、此飲んでみる。美味しいぞ」

やはり手口が同じ

別に犯罪をする訳では無いのだが

「……………」

だがシャドウはその場を動かこうとしない

「どうしたシャドウ？」

すると

「……………ガル」

じりじりと後ろへ下がりはじめた

「大丈夫、毒なんて入ってねえからよ」

と説得するも

「ガル……………、ガルウ……………」

どうやら見破られたようだ

どんどん後ろに下がっていく

「ちっ、気付きやがったか。まあいい、飲ませりゃいい話だ……」

今の海斗が悪人にしか見えないのは気のせいだろうか

「ガル………、ガ？」

何かにぶつかったらしく後ろを見ると――

「……………（汗）」

大きな樹が立っていた

シャドウに逃げ場無し

「さあ……………」

「ガルウ……………」

諦めろ、シャドウ

「ガルウウウウ……………！！（泣）」

シャドウ、君の事は忘れない……

「どうだ？」

結果は――

「……………ハアハア（汗）俺っちの寿命が縮まるかと思ったぜ……………
（汗）」

「……………」

言葉が出なくなった海斗

「ああ……………、俺っちも遂に喋り始めちまったぜ……………」

（シャドウ喋るとこんななんだ……………）

訳の分からない感情に包まれた海斗だった

第三十九話 計画、そして——（後書き）

如何かな？

喋りがヤケクソなのは気のせいだ

とまあ喋るとどうなるのかという話でしたw↑とまあって何だよと
まあって

其ではあゝ

よいお年をゝ
♪

ちえすとおおおおおおおお！……！！！！

第四十話 遂に？（前書き）

ちょっとフラグ立てました

リオ

「何を（汗）」

伏線も張りましたw

ラセ

「何の（汗）」

まあ直に分かるのさ

第四十話 遂に？

レクスとシャドウが喋れるようになってから数分後

「……………」

其所は沈黙に包まれていた

「……………だあゝ！ もう！」

だが遂にシャドウが耐えられなくなり口を開く

「もう過ぎた事だ！ 今更気にしたってしょうがないだろ！」

最もな意見……………なのだが

（（その原因の一つはシャドウなんだが……………））

シャドウ以外、全員が同じことを思っていた

「俺っちはどうすりゃあいいんだよ……………」

若干涙眼になるシャドウ

そんなシャドウに対して皆の考えは

（（ならまずは静かにして欲しい……………））

何故か苛々が溜まっていく皆だった

其から小一時間経った

「まあ……………」

リオが口を開く

「喋れるようになっても別段特に何も変わんねえしなあ……………」

「確かに」

リオの意見にラセが頷く

確かにリオの言う通りである

特に何も変わりはないのだから何故悩む？ という考えが皆の中で生まれ始めた

のだが、真面目なのは此処までだったりする

「リオにしては珍しくまともな意見だな」

ラセの鋭い一撃

「酷いぞラセ、俺は何時だってまともだ」

「冗談だ」

「絶対嘘だ」

このちょっとしたショートコントにより沈黙の空気が吹き飛んだ

皆笑い転げている

だがリオだけは若干涙眼になっていた

「酷いぞお前等……………」

其から暫くして

「んじゃあそろそろ行こっか」

何度目かの町村探索を開始した

「かなり時間を喰っちゃったからな、さっさと見つけねえとまた日が暮れちゃう」

海斗の言う通り、結構な時間が過ぎている為速く見付けないとまた野宿という事になる

「私もう野宿なんて嫌よ」

秋葉がそう言った瞬間、リオの身体が反応した

「……………」

思い返すリオ

あの恐怖の夜を……………

『キエーイ!』

『ガアアアア!』

そして、

あの勘違いの悲劇を……………

『……………ガルアアアア！！』

『ガアアアアア！！！！』

「……………」

思い出したくないものを思い出してしまったりオ

「俺空から探してみる」

そう言って一人飛び立つ

そしてその上空で

「もう、野宿なんて……………、嫌だああああ！！！！」

泣きながら、叫び、飛び回っていた……………

そんな中

「ぐす……………ん？ あれは……………？」

涙が溜まっている目をよく凝らして見てみる

が、やはりばやけてよく見えないので顔をブンブンと振ると

「……………村なのか？」

なんと、村らしき場所を発見した

「兎に角彼奴等に伝えて来よう！」

リオは急いで皆の元へ向かった

そしてリオの話を聞いた皆は村らしき場所へと急ぎ足で向かって行った

そんな皆の様子を

「……………」

青白い光を放つ、幻獣、キリンと、そのキリンの隣に立つ真っ白な髪を靡かせた一人の少女が、終始見ていた

第四十話 遂に？（後書き）

さあさあさあ！

遂に新キャラという名の伏線ですよ！

リオ

「誰だよ？」

ラセ

「こつそり教えてくれ」

うゝみゆ

特別だぞ？

……

ラセ&mp・リオ

「……」

……なのさ

ラセ

「ふむ……」

リオ

「まじすか」

まあ楽しみに待ちなさいw

第四十一話 大搜索？（前書き）

どーもー

前回の更新から一ヶ月以上も間が空いてしまいましたが……

少しネタが補充出来たので更新を再開します

其でも更新速度はミジンコ以下ですがねえw

シャドウ

「……………（汗）」

ガイ

「あー……………久々にバトルやりてえなあ……………」
↑ w

まあなにはともあれ新キャラですよー♪

第四十一話 大搜索？

やつとこさ村を見付けた一行

「な……………、なんだ此処……………？」

だが其処には人の姿が無くただ空しく家や店が建ち並び風が吹いているだけだった

「うーん……………」

龍人はとにかく人を捜してみる……………が、やはり誰も居ないらしい

「此方も居ねえ」

海斗が探した辺りも全滅らしい

「しかし不思議ね……………。寂れてる割には新築された家とかあるみたいだし」

そう、秋葉の言ったことが一番の謎を呼んでいた

如何にも今立てたばかりのような家が何件も建ち並んでいるのだがそんな家にすら人っ子一人いないのだ

「……………誰か居ないのかなあ」

「…………、ボク達以外の人間の臭いはしないみた…………い…………?」
「どうしたのレクス?」

「…………僅かにだけど、人と…………誰か居るみたい!」

レクスが言うには人とモンスターがこの村に一緒に居るらしい

「…………なら早速探すしかないな」

「俺とラセは空から探すぜ!」

そう言っつてラセを乗せて飛翔するリオ

「じゃあ俺達は村の一番外側を探すか」

「俺っちに任せろ!」

シャドウにまたがり神速の域で居なくなる海斗

だが、

「早すぎるわああああ!?!?!」

という悲鳴が聞こえたのは言うまでもないだろう

「じゃあ私達は地中からね」

「俺に任せな！」

そういつてガイにまたがり大地の中へと消えていく

そんな様子をみて

「秋葉……………大丈夫かなあ……………」

と呟く龍人

だがその時に、「私を嘗めんじやないわよ!」とかツツコミが聞こえてきたらしい

「……………じゃあ僕達も、行こっか」

「うん」

皆を見送った後、龍人もレクスにまたがり、人を探し始めたのだった

少しだけ時間を遡り海斗の悲鳴が響き渡った頃、

「……………!」

白がかった美しい銀色の髪、左の瞳は緋く、右の瞳は翡翠の色をし

ている一人の少女と、古龍種で蒼白く光輝き、立派な角を持ち綺麗な尻尾を持つモンスター、キリンがその叫び声を耳にしていた

「……………」

その叫び声を聞いたキリンが少女にピタリとくつつく

「大丈夫ですよ……………蒼冥^{そうめい}」

蒼冥、と呼ばれたキリンはそれでも怖いのかその少女の手を握っていた

「……………やはり蒼冥は怖がりなまななんですネ」

「今其は関係無いよ……………白^{ましろ}」

白、と呼ばれた少女は蒼冥に「冗談です」と優しく言った

「……………それにしても、騒がしいですね」

「さっきの人達だと思っ……………」

そう、この二人こそが龍人達が村に入る前から（シャドウやレクスが喋るようになった頃から）龍人達を見続けていた二人なのだ

「……………放って置きましょう」

さらりとスルーすることにした白

「……………」

それに黙って同意する蒼冥だった

龍人達が（白と蒼冥を）探し始めて数分

聞こえるのは海斗の悲鳴だけだった

第四十一話 大搜索？（後書き）

ええ、はい

鳳仙花様の「モンスターハンター 海の雷と日常」から白と蒼冥です！

白、蒼冥

「「……………」」

なんですかw

断固拒否ですかこらぁw

白、蒼冥

「「……………」」↑頷く

なんか喋ってくれ……………（汗）

白、蒼冥

「「……………」」↑断固拒否中

……………

反応に困るなぁ……………（汗）

白

（私どれだけ出番があるんだろうか……………）↑熱帯イチゴ食べてる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8679h/>

ある友情と絆の物語

2010年10月9日22時47分発行